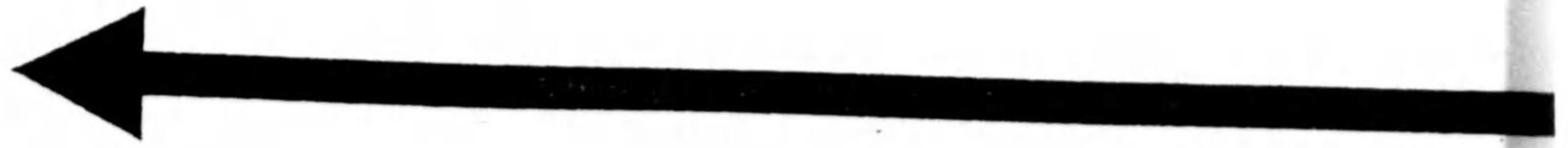




宇都宮市勸業要覽

宇都宮市役所編

始



宇都宮市勸業要覧



宇都宮市勸業要覽



初代 矢島 中市長



三代 谷 誠之 市長



五代 松永和一郎 市長



二代 本多 録吉 市長

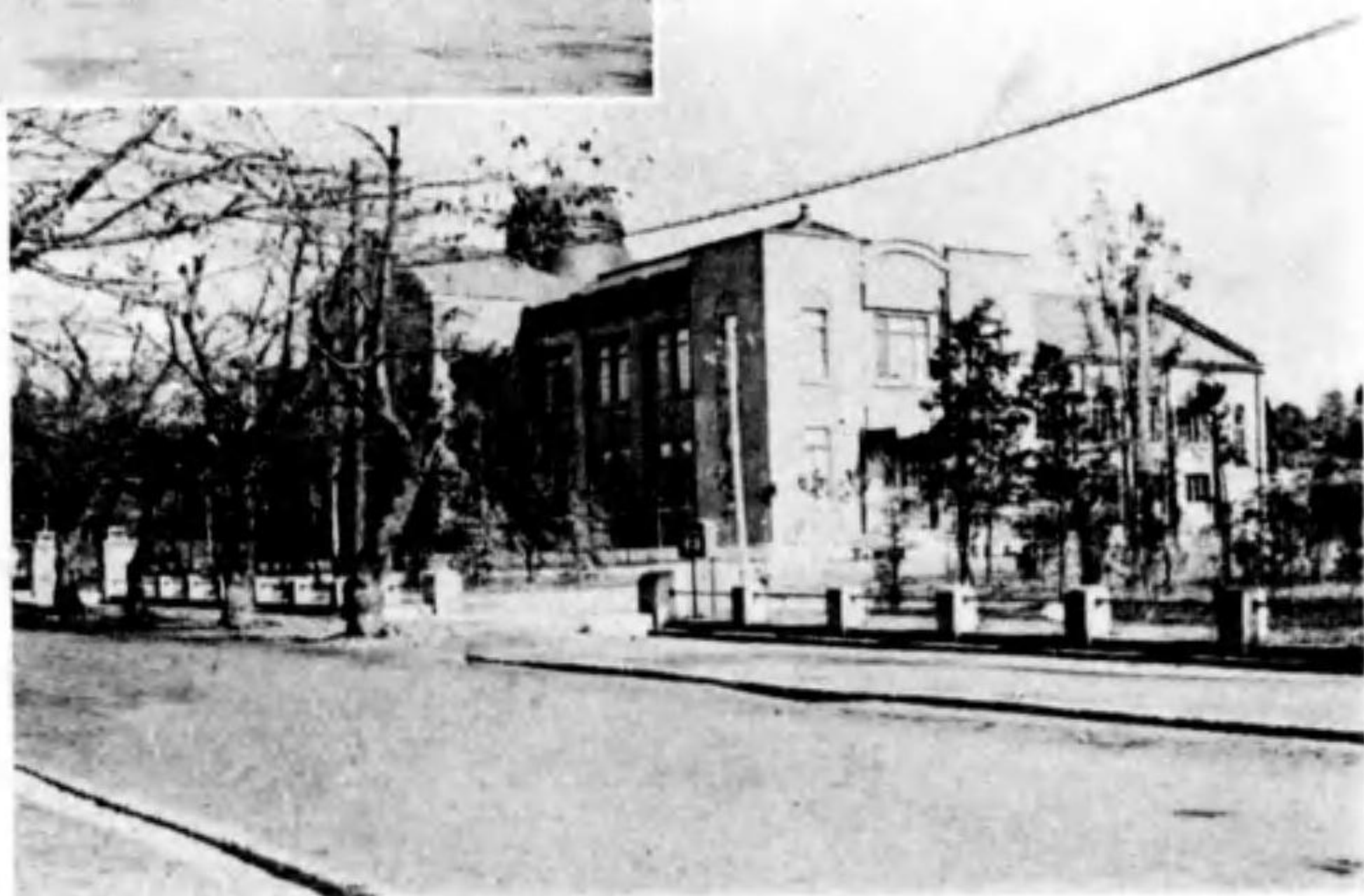


四代 川崎 参一郎 市長



六代 石田 仁太郎 市長





上 栃木 縣 廳  
 左 宇都宮商工會議所  
 下 栃木縣商工獎勵館



現中井久三助役



現河合藏市長



宇都宮市役所



國幣中社  
二荒山神社



招魂社



街



聖跡  
明館



蒲生神社



市

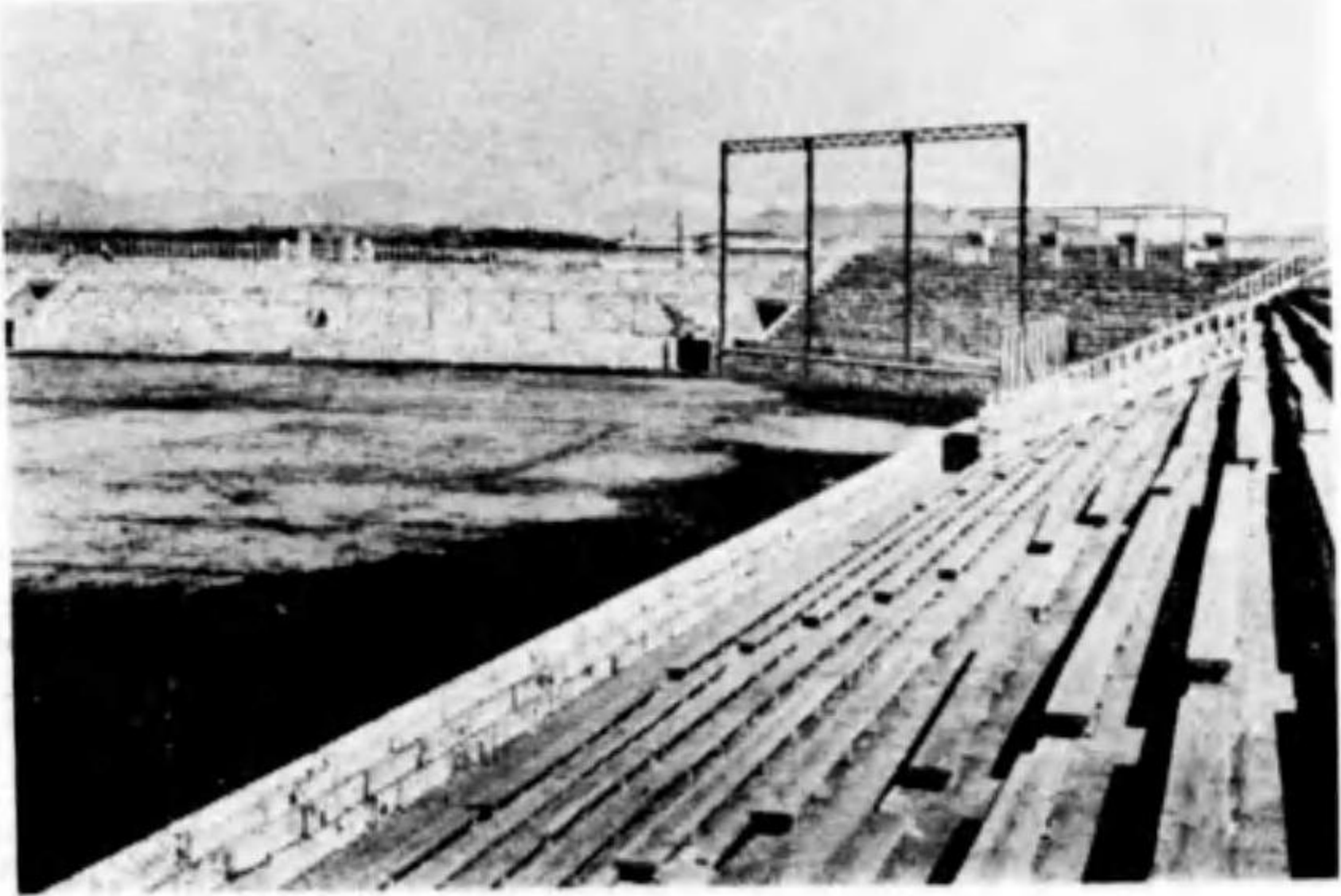
天皇視臨賜醜の碑(本丸跡)



八幡山公園入口



常設野球グラウンド



宇都宮驛(省線)



大通り



東武宇都宮驛



14.2<sub>p</sub>-191

凡例

- 一、本書は本市商工業の趨勢と主要物産の統計及商工人名録とに分ち併せて郷土紹介の一助たらしむ可く輯録したものである。
- 二、統計は最近に於ける本市産業統計及其他の資料に基きその主なるものを摘録したものである。
- 三、商工人名録に就ては昭和七年度營業收益税十五圓を標準として調査したものである。
- 四、本市に調査事實なき分は夫々關係官公署を煩はして資料を得たものである。關係官公署の勞を多とし謝意を表す。
- 五、總じて今回の編輯は突如の間に編纂したるものであるから、誤謬脱漏の點なきを保し難し幸に諒せられんことを。

大谷観音



石材採掘場



大谷石山の観



## 緒言

各種産業の興隆は都市の發展を促すことはもよよりはあるが就中商工業の振興がその根本的要素をなしてゐる。

栃木縣廳所在地としての我が宇都宮市は帝都を隔る一〇五軒、東北本線及國道幹線を通して遠く奥羽地方への要衝を扼し東武電車及自動車網により交通愈々開け加ふるに近年市民の努力と時勢の推移によつて市況の活氣を呈し全く面目を一新するに至つた。

更に本市の大都市計畫及勸業方針は益々生産都市への轉向氣運を熟さしめ、陽西、陽南の土地區劃整理組合事業の完成と共に將來工業都市としての進展亦刮目して待つべきものがあらう。

本書は宇都宮市産業の概要を記し商工業を江湖に紹介し併せて本市商工業發展の一助たらしむる目的を以て編纂した次第である。

目次

一、總說

1. 地名……………二  
(1) 池邊郷—(2) 小田橋驛—(3) 宇都宮

2. 沿革……………三  
(1) 沿革の概要

3. 位置面積地勢及廣袤……………六  
(1) 概要—(2) 位置面積廣袤表—(3) 各町別人口戶數表

4. 氣候……………九  
(1) 緒言—(2) 氣温及濕度—(3) 降水量及降水日數—(4) 風向と風力及暴風日數—(5) 天氣—(6) 雷雨

1. 概說……………二〇  
(1) 概要

二、産業

2. 商業……………三

(1) 概要—諸統計

3. 金融……………六  
(1) 概要

4. 工業……………九  
(1) 概要—諸統計

5. 農牧、水産……………一〇  
(1) 概要—諸統計

6. 交通運輸……………一三  
(1) 概要—諸統計

1. 御聖跡……………一六  
(1) 明治天皇御遺跡—(2) 御聖跡

2. 觀光案内……………一七

三、郷土のほり

- (1) 國幣中社二荒山神社—(2) 八幡宮—
- (3) 八坂神社—(4) 蒲生神社—(5) 招魂社
- (6) 勅旌碑—(7) 國寶阿彌陀如來像—
- (8) 國寶鐵塔婆—(9) 宇都宮城趾—(10) 奥平内藏允の墓—(11) 傳説の釣天井—
- (12) 二の丸の大櫓—(13) 三の丸の大銀杏—(14) 白ヶ峯—(15) 花尾崎—(16) 鏡ヶ池—
- (17) 求食沼—(18) 鷺鷥塚—(19) 七木、七水、八河原—(20) 三藏山の古墳—(21) 八幡山公園—(22) 軍道の櫻

3. 郊外名勝……………

- (1) 名勝地大谷—(2) 大谷觀世音—(3) 遊

樂園—(4) お止山—(5) 多氣不動尊

4. この地の名物土産品……………

- (1) 宇都宮名物—(2) おみやげのさまさま—(3) 俚語

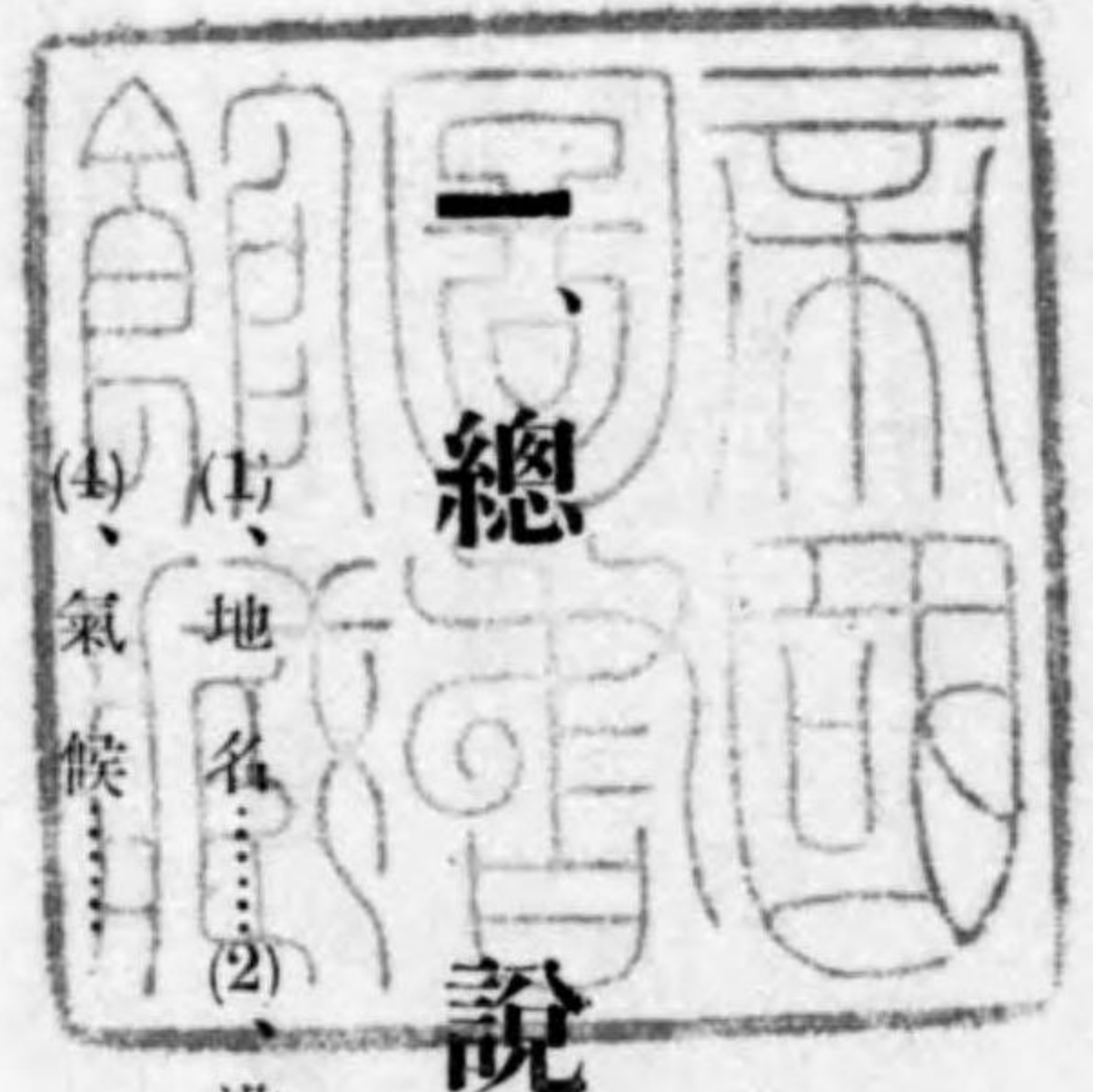
5. 宇都宮名代の行事……………

- (1) 二荒山神社祭典と宇都宮—(2) 盆踊り—(3) 商工祭

6. 雑 録……………

附 録

商工人名録



- (1) 地名……………
- (2) 沿革……………
- (3) 位置面積地勢及廣袤……………
- (4) 氣候……………

### 一 地名

- (1)、池邊郷—(2)、小田橋驛—(3)、宇都宮

宇都宮の地名は其の初め「池邊郷」に稱し、小田橋に唱へ、更に宇都宮に呼ぶに至つたものである。

#### ○池邊郷

上古時代に於ては土地開けず、深林原野荒蕪にして相連り帝都を距たるこゝ遠くして、王化に浴せず、微々たる寒郷であつたが、地方自治民政に勲業善績を樹てられ給ひし太荒人神を奉祭してより、炊煙湖水の邊を擁して立ち昇るに至りて「池邊の郷」に稱しをるものゝ様である。

和名抄に「河内郡池邊郷」にありは即ちこれにして、現在の池上（いけのへ）町は其の遺名である。

#### ○小田橋驛

又、古田橋にも書く。小田橋は元來田川に架設したる橋の名であらう。

宇都宮氏既に城廓を構へてより、道路漸く通じ、北は奥羽に赴き、南は鎌倉を中心として、上國

に達する要衝となりて戸口増加し、人馬の往來頻繁なるに及んで橋名に因み小田橋驛に汎稱された。

吾妻鑑に「文治五年七月十九日、鎌倉御進發、二十五日著御于下野國古多橋驛、先御奉幣宇津宮」にありは是である。

#### ○宇都宮

宇都宮は二荒山神社の別號にして又宇津宮にも書き、地名では無かつたが、之を地名として呼ぶ様になつたのは、鎌倉時代に屬し、宇都宮三代の城主藤原朝綱以後のこゝであらう。

### 二 沿革の概要

攝政藤原兼家の二男道兼の孫、正四位右中将讃岐守中宮亮兼房の二男であつた石山寺座主「示圓」今より八百五十餘年前後冷泉天皇の康平六年二月下野國守護職に補せられて石山寺座主並日光座主となりしより後代々宇都宮を苗名として城廓を構へて武威を振ひ、四隣の豪族を従はせ、神社を修め、佛寺を起して四民を治め土地の開發經營を計り繁榮の招致に努めてより人家年を逐ふて増加し

漸く市井をなし、宇都宮城下として發展するに至つたのである。

其の後慶長元年秀吉は二十二代城主國綱の代に至り宇都宮一族郎黨を悉く闕所とし同二年宇都宮氏は没落し（宗圓座主より凡そ五百五十一年）淺野長政城中に入りて之に代り、慶長四年蒲生秀行替りて國政を執り、大河原氏奥平氏外數氏更々之に居り、最後に戸田氏（宇都宮氏首祖より四十七代八百二十年間）に及んでゐる。

此の間累代の城主、市井の經營を怠らず、城廓の修築、道路の開鑿、橋梁の架設等、市街の整理に盡しつゝありたるため、慶長年間にも三十二の市坊を形成して居た。其他東照宮を日光山に造営し續いて大猷院殿廟を建築したる爲め、宇都宮は徳川幕府の累代の將軍を始め諸侯其他社參の關係地となり奥羽地方諸侯參勤交代の要衝地となるに及んで、人馬の出入往來も頻繁を極め、市街は膨脹して四十八個の市坊を見るに至つた。

明治元年四月十九日（戊辰の役）兵燹に罹り市街城廓は殆ど灰燼に歸したが、其後次第に恢復し明治四年四月廢藩置縣の改革あり下野國には宇都宮、栃木の二縣が置かるゝことになつた。

一宇都宮縣は之を宇都宮に置き、下野の東部に屬する河内、鹽谷、那須の四郡を支配し、栃木縣は之を栃木町に設け都賀、寒川、安蘇、足利、梁田の五郡及び上野國新田、山田邑樂の三郡

を其所管に定む。

明治六年六月宇都宮縣は廢されて、栃木縣に合併されたが、明治十年前後になつては宇都宮は五十七個町名を數ふるまでに發展したので、同十七年一月栃木縣廳の位置を宇都宮に移され、縣廳舎は塙田町に新築された。

初め明治五年十一月、大小區制を布いて、市街を六區に劃し、各々に戸長役場を置いた。其後明治十一年十一月に至り區務所を廢して郡役所が置かれるに至つた。

明治二十二年四月宇都宮の範圍を擴張して町制に改められ、明治二十九年四月河内郡より獨立して市制が布かれたので市役所を旭町（二の丸跡）に設け全市を惣管して市は益々發展して現在に至つてゐる。

明治五年七月一日初めて郵便局の設けあり、同七年電話の取扱ひ、鐵道は明治十八年七月東北本線の開通を見、更に二十三年日光線の開通ありて交通は至便になつた。

明治三十五年電話事務開始され、同三十九年專賣局煙草製造所設置地となり、明治四十年第十四師團衛戍地となりて市街は郊外に發展した。

明治四十五年水道敷設内務大臣より許可され、大正十一年四月都市計劃調査事務を開始したが

越えて昭和二年四月より都市計劃施行地ニ指定され、郊外地を合して大都市計劃を爲しつゝ、現在に至つてゐる。

大正十四年宇都宮市は鹽田園を買収し、宇都宮市八幡山公園ニ改稱し、諸般の設備を施し視界の雄大ニ自然の利用は東北唯一ニ稱せられるに至つてゐる。

昭和六年四月西南部の平坦なる廣畑を市街地たらしむる可く陽西土地區劃整理組合設立され、同六年十二月また陽南土地區劃整理組合道路の新設ニ小公園地其他市街の諸設備に努めてゐる。

本市は維新の兵燹により商工業衰へてより地方の都市として發展したのみではあるが、現在に至つては生産都市への氣運勃興してゐるから、大都市計劃の完成と共に將來刮目して視るべきものがある。

### 三 位置面積地勢及廣表

#### 一、概要

- (1)、概要—(2)、位置面積廣表—(3)、各町別人口戸數表

我が宇都宮市は帝都を北に隔るゝ、こゝ一〇五九分、栃木縣の中央に位し縣廳所在地にして本縣

唯一の市街地である。

地勢は東南に及んで低く、西北に至るに伴つて高くなつてゐる。

市中には明神、招魂の二山より、三藏、八幡、戸祭の諸山の高山はあるが概して岡巒に過ぎず、田園遠く開け四顧大概平原である。

田川は市街の東部を南下し、釜川は西北より東南に向つて中央を貫流し、新川は市街の西部を北より南へ走つてゐる。

明治二十九年四月市制の施行せらるゝと共に益々發展し、戸數一萬七千餘戸、人口八萬二千餘人を算し、商業を中心として、工業もまた近時發展の曙光を認めらるゝ様になつてきた。

#### 二、位置面積及廣表

位置	面積	周園	廣表			町數	人口 (昭和八年末)		戸數
			東	西	南		北	男	
東經	一元五五分	一〇三分	一里四町	一里二町	一里八町	六町	四〇,九八三	四一,三二〇	八二,二九三
北緯	三六分	四九一〇	一里二町	一里八町	一里三町	六町	四〇,九八三	四一,三二〇	八二,二九三

#### 三、各町別人口戸數表

(昭和八年末)

町名	戸數	男	女	計
相野宮路	四九六	二六八	二二八	四九六
日野宮路	四九六	二六八	二二八	四九六
劍宮路	四九六	二六八	二二八	四九六
今小路	四九六	二六八	二二八	四九六
大宮	四九六	二六八	二二八	四九六
千手	四九六	二六八	二二八	四九六
宮島	四九六	二六八	二二八	四九六
寺島	四九六	二六八	二二八	四九六
扇田	四九六	二六八	二二八	四九六
小田	四九六	二六八	二二八	四九六
小田	四九六	二六八	二二八	四九六
清水	四九六	二六八	二二八	四九六
新水	四九六	二六八	二二八	四九六
大工	四九六	二六八	二二八	四九六
上原	四九六	二六八	二二八	四九六
小袋	四九六	二六八	二二八	四九六
博勞	四九六	二六八	二二八	四九六
川向	四九六	二六八	二二八	四九六
押切	四九六	二六八	二二八	四九六
石原	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
元石	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
中河	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
下河	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
河原	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
松原	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
一松	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
二松	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
三松	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
四松	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
新石	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
石條	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
木條	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
路木	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
菜路	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
黑橋	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
登橋	二〇〇	一三三	六七	二〇〇
新木	二〇〇	一三三	六七	二〇〇

宇都宮市の氣候

一、緒言

本市は海岸を隔るゝこゝ六十餘軒なれば、氣候は稍内陸性を帯び、之を東京、銚子、水戸、新潟等海岸地方に比すれば寒暑の差甚だしきは固より、更に之を内陸の前橋、長野、熊谷等と比較する

町名	戸數	男	女	計
花房	一九九	一〇〇	九九	一九九
伊賀	一九九	一〇〇	九九	一九九
大賀	一九九	一〇〇	九九	一九九
境住	一九九	一〇〇	九九	一九九
小幡	一九九	一〇〇	九九	一九九
清住	一九九	一〇〇	九九	一九九
本郷	一九九	一〇〇	九九	一九九
小馬	一九九	一〇〇	九九	一九九
西馬	一九九	一〇〇	九九	一九九
泉上	一九九	一〇〇	九九	一九九
池上	一九九	一〇〇	九九	一九九
傳馬	一九九	一〇〇	九九	一九九
江野	一九九	一〇〇	九九	一九九
曲江	一九九	一〇〇	九九	一九九
合計	一九九	一〇〇	九九	一九九
壽馬	一九九	一〇〇	九九	一九九
馬場	一九九	一〇〇	九九	一九九
鐵炮	一九九	一〇〇	九九	一九九
杉原	一九九	一〇〇	九九	一九九
尾上	一九九	一〇〇	九九	一九九
旭一	一九九	一〇〇	九九	一九九
旭二	一九九	一〇〇	九九	一九九
今泉	一九九	一〇〇	九九	一九九
塙田	一九九	一〇〇	九九	一九九
宿郷	一九九	一〇〇	九九	一九九
築原	一九九	一〇〇	九九	一九九
西祭	一九九	一〇〇	九九	一九九
戸計	一九九	一〇〇	九九	一九九

も尚ほ氣温の變化の激しきを見る。蓋し本市はその周囲の地形稍複雑にして、遠くは日光、那須の連山及八溝山系に屬する諸丘陵を繞らすあり、近くは清住町臺地、八幡山及二荒山高臺等の起伏するありて風力を著るしく減殺するに因るものなるべし。

風力弱きこゝは實に本邦第一にして、本縣内に於ても本市及其の附近は特殊の無風帶を爲せり。猶本市の氣候に於て特に他に比類なきは、快晴日數及雷雨日數の著るしく多きこゝ及曇天日數、暴風日數の著るしく少きこゝす。今其の概要を他の都市と比較表示すれば別記の如し。

宇都宮	東京	銚子	熊谷	水戸	前橋	長野	新潟
平均氣温	一三・九	一四・七	一三・四	一二・七	一三・一	一一・〇	一二・六
毎日最高氣温ノ平均	一八・六	一八・〇	一八・九	一八・三	一八・四	一六・八	一六・七
毎日最低氣温ノ平均	七・三	九・九	九・〇	八・二	八・七	六・三	九・二
毎日最高最低氣温ノ差ノ平均	一一・一	八・七	九・九	一〇・一	九・七	一〇・五	七・五
風力	一・八	三・七	六・四	三・三	三・三	五・二	四・九
日快日曇日數	七三	五〇	六九	六三	五七	四三	三三
雨天數	一三三	一四八	一五〇	一四七	一四三	一三九	一九八
年水量	一六七	一五七	一五七	一五七	一五七	一〇七	一八四

此の故を以て、夏日日中一時は暑熱甚だしきこゝあれども、屢々驟雨ありて忽ちその暑さを去らしめ、夜半に至れば却て冷氣を覺ゆる程なり。又冬期氣温は著るしく降下すれども、好晴に恵まれ日照多く、風弱ければ寒氣の堪え難き程にもあらず、従つて一度本市を知る者はその住み易きを愛し他の地より移りて永住するもの多し。

是等氣候の特性は又市の産業上にも影響する所あり、染色、製紙、其他乾燥を必要とする傘製造、煎餅製造等の發達し、干瓢、煙草等の集散を爲すは即ち之なり。

其他氣象の激變、雷雨多きこゝ、風力弱きこゝ等市民の日常生活・經濟・スポーツ・衛生等に及ぼす影響頗る大にして、延いては市民の氣質人情等に關係する所大なるを見る。

## 二、氣温及温度

氣温の年平均は一二度三にして、之を他の都市に求むれば、水戸、新潟、大邱、天津等と匹敵せり。年變化を見るに一月下旬最も寒く、同月廿四日の平均年氷點下〇度一、又八月上旬最も暑く同月八日平均年二五度三を兩極とす。最低氣温の極は明治三十五年一月二十四日の氷點下一四度八、最高氣温の極は大正十二年八月九日の三六度四なりとす。冬季最低氣温の氷點下に降るは平年十一月七日より四月十九日の間約一六三日にして、同平均氣



温の氷點下に入るは十二月十六日乃至三月四日の約七六日間なり。湿度は年平均七七%にして、内陸にしては稍多濕の感あれども、その原因は夜間の過温と風力の弱きとに歸すべし。湿度は七月、九月の雨期に於て最も高く、一月及十二月の寡雨の季節に於て最も低し。之を市民生活より見れば冬季の乾燥より初春の乾燥は稍苦痛を感ずれども、夏季の多濕は太平洋沿岸地方に比すれば極めて輕微と云ふべし。

三、降水量及降水日數

降水量は年平均一六三〇耗にして、月別平均に於ては九月(二四三耗)七月(二二九耗)八月(二二四耗)を最多とし、一月及二月(三九耗)を最少とす。

本市の降水は夏季雷雨に伴ふもの多く凡そ四〇%は之に屬し、驟雨性にして屢々田川、釜川の汎濫を來すことあり。沿岸民の被害多し。豪雨の記録は明治四十三年八月十一日(日量一五三耗)及大正二年八月十三日(四時量一二四耗)等とす。

降水日數(日量〇耗一以降水)は年平均一五八にして、六月(一九日)七月(一八日)を最多とし、十二月(六日)十一月(七日)を最少とす。連續降雨なかりし例は大正六年十一月二十八日より大正七年一月四日に至る三十八日間にして、連日降雨ありし例は明治三十六年七月九日より同年

九月十五日に至る六十六日間を以て記録とす。

四、風向と風力及暴風日數

風速度の年平均一米三にして、月別最強は三月及四月の一米五、同最弱は十月及十一月の一米〇とす。最強風の記録は彼の明治三十五年壬寅暴風雨の際一九米〇(東南東)を觀測せしものにして之を他の地方に見るに鹿兒島に於ける七一米、石垣島に於ける六九米等あり全く論ずるに値せず。

暴風日數に於ても本市の年一六は京都の一五に亞ぎ、全國第二位の少き所、之を澎湖(二二二日)四坂島(二二三日)に比すれば之又驚異に値すべし。(註風程改正せられ現行觀測法に據れば暴風日數は一般に減少せり)

風向は八幡山及清住町の高臺と田川釜川の低地により、南北に谷の延長するあり。本市はその内に所在するを以て南北の風卓越し、一年を通すれば四月乃至八月は南風多く、他の七ヶ月は北風を最も多く觀測す。一日の内においては日中は概して南寄りの風多く、夜間は北寄りの風流行す。

五、快晴、曇天、雪、霰、雹、霜等

快晴日數は年七二にして、多きこと全國第一とす。之を月別に見るに十二月、一月は十五日内外

にて最も多く、七月、八月等は僅に一日に過ぎず、之に反し曇天日数は一三二にして、夏季は月平均一八日内外、冬季は三日内外を算す。雪は年を通じ二十日内外降り、積雪は寧ろ稀なり。平年初雪は十二月十八日、終雪は三月二十五日、その間一〇一日に及ぶ。積雪を見るは平年十二月二十九日より三月十七日の間にして、積雪の五日に及ぶこと十糎以上に達する事は稀なり。雪質は嚴寒の候粉雪を見る事あれども、多くは多濕のボタン雪なり。

霰は冬季間を通じ平年六日内外降る事あれども、北國のそれに比すれば敢て論ずるに足らず。

雹は年々平均二回程度襲來するこゝあり、市内にて園藝、花卉等被害あり。最も多きは四月及五月にして盛夏には珍らし。

霜も亦園藝家の恐るゝ所にして、平年初霜は十月二十八日、終霜は四月二十九日、此間一八三日あり。初霜の早き例は大正十二年十月十二日、終霜の最も晚き例は大正元年五月二十五日とす。

六、雷 雨

本市を襲ふ雷は多くは熱雷雨にして、好晴の日の午過ぎ發雷するを常とす。襲來の経路に凡そ二つあり、一つは北西方より來るもの、之を俗に日光雷と稱す。他は南西方より來るものにして勢強く、襲來迅速なれば稱して三杯と云ふ。蓋し「飯三杯食ふ間に到達する」の謂なり。此の外東方より

り本市に近寄るものあれど勢強からず郷人は之を恐れず。

日光雷及三杯は本市の西、北西及南西の周邊部の樹木、民家その他高き地物に屢々落雷するこゝあり、市の内部にして低き所には落雷は稀なり。高層建築物及公共建築物等には避雷設備稍完備せらるも、個人建築物にありては殆どその設備を見ず。

(宇都宮測候所ニ深厚ノ謝意ヲ表ス)

宇都宮氣象概況 (宇都宮測候所調) 昭和六年

月	氣 壓 700+				氣 温				濕 度 (攝氏)						
	平均	最高	最低	日 差	平均	最高	最低	日 差	最大	同期	最高	最低	日 差	日 差	
1	53.3	64.8	41.7	26	0.6	7.1	-4.2	11.3	15.5	29	14.3	8	-9.3	29	23.6
2	51.0	63.2	36.5	6	1.0	7.9	-4.6	12.5	18.9	20	15.0	22	-9.3	20	24.3
3	50.9	61.7	36.6	28	4.1	10.1	-0.9	10.9	18.1	29	20.0	23	-6.7	7	26.7
4	52.1	60.3	39.1	28	10.8	16.7	5.6	11.1	18.5	18	22.9	25	-0.7	2	29.2
5	49.9	57.4	36.0	14	16.3	23.4	11.5	11.8	20.7	8	29.4	8	3.6	12	25.8
6	47.5	54.2	26.5	1	20.8	26.5	16.2	10.3	18.2	12	33.6	27	9.8	11	23.8
7	49.0	54.0	44.9	31	25.4	30.5	22.1	8.4	12.0	25	35.4	25	17.6	4	17.8
8	47.8	53.7	42.6	30	25.9	31.3	22.5	8.8	12.9	30	32.7	22	20.1	20	13.6

月	水 蒸 氣 壓 力				濕 度		降 水		雲 量		上 層 雲 量					
	極		平均		極		平均		極							
	最大	最小	日	日	最大	最小	日	日	最大	最小						
1	3.4	6.3	12	1.8	28	72.0	32	15	37.0	16.8	6	5.2	6	4.5	—	—
2	3.3	5.7	8	1.6	23	68.0	25	23	14.0	8.7	17	4.9	17	4.1	S 53W	—
3	4.2	10.4	22	1.8	22	69.5	27	21	81.8	20.6	27	9.7	23	6.9	N 84W	42
4	7.1	12.2	26	3.1	1	74.2	27	1	98.1	29.7	9	13.3	9	7.8	S 83W	99
5	10.3	16.9	21	3.5	6	72.5	15	6	53.1	27.9	22	13.0	22	6.9	N 81W	91
6	14.0	21.4	30	8.1	5,11	77.8	32	5	200.1	65.7	19	43.5	19	7.7	S 84W	79
7	20.1	24.3	24	14.2	4	83.8	47	25	197.2	70.1	29	70.1	29	8.1	—	—
8	20.5	25.8	4	16.6	30	83.7	49	28	406.8	102.0	15	93.3	15	8.0	S 27W	56
9	14.5	23.3	4	8.2	26	75.9	33	5	49.8	13.2	30	13.2	30	6.2	N 68W	100
10	9.7	15.5	7	4.9	27,28	78.3	30	24	163.0	46.0	20	14.9	16	6.9	S 88W	86
11	6.5	11.7	16	3.0	29	76.1	35	8	72.9	18.8	11	8.1	11,27	5.0	S 79W	98
12	4.2	8.1	9	2.5	20,21	72.9	29	20	49.7	15.2	9	8.2	16	3.2	S 21W	85
全年	9.8	25.8	4Ⅷ	1.6	23Ⅱ	75.4	15	29	1,423.5	102.0	15Ⅷ	93.3	15Ⅷ	6.3	S 84W	82

月	風				最低地溫		地 面 溫 度				日 照				
	最 大		平 均		極		極		極		極				
	速度	方向	日	日	最高	最低	日	日	最高	最低	日	日			
1	1.2	6.0	W	8	34	-10.7	-16.3	29	1.5	14.6	7	-2.8	29	162.2	53
2	1.4	7.2	WNW	26	28	-11.5	-16.0	20	2.7	17.8	14	-2.8	1	163.1	55
3	1.6	9.2	W	21	34	-6.2	-14.1	14	6.6	24.2	23	-0.7	9	144.7	39
4	1.5	5.0	N	10	9	3.2	-3.0	2	12.6	30.8	29	1.8	2	114.8	29
5	1.7	8.5	SSW	3	11	9.1	0.2	12	19.6	36.2	31	8.4	12	190.4	44
6	1.2	5.3	SSW	6	13	13.8	5.6	11	23.9	39.9	27	12.3	11	163.9	39
7	1.1	6.3	SSW	25	21	20.1	14.3	4	28.3	42.8	21	20.6	10	142.4	32
8	1.1	4.9	N	29	16	20.5	17.6	17	29.0	42.2	23	21.4	30	174.8	42
9	1.2	7.7	SSW	4	4	14.2	6.3	26	23.7	39.7	2	11.4	26	180.0	49
10	1.3	8.2	NE	16	38	6.7	-7.0	26	15.8	30.8	5	2.2	28	162.0	47
11	1.1	7.5	NNW	28	31	-0.8	-7.9	29	9.6	24.4	2	-0.4	29	177.4	58
12	1.3	7.7	N	17	35	-6.6	-11.5	24	3.3	15.8	5	-1.9	24	193.9	66
全年	1.3	9.2	W	21Ⅲ	15	4.3	-16.3	29Ⅰ	14.7	42.8	21Ⅲ	-2.8	29Ⅰ	1,984.6	45

月	地 中 溫 度			平均	蒸 發 量		天 氣		氣 象		最低氣溫 0°以下	最高氣溫 30°以上			
	0.1米	0.2米	0.3米		極	日	快晴	曇天	降水	雪			雹	電雷	霜
1	1.9	3.2	3.6	1.5	2.3	28	11	8	3	9	—	—	29	29	—
2	2.3	3.2	3.4	2.2	3.6	27	9	5	5	9	—	—	25	27	—
3	6.0	6.1	6.3	2.3	4.3	28	—	14	17	8	—	—	1	15	—

4	12.3	11.7	11.2	9.8	13.6	3.4	4.9	18	1	20	11	—	—	—	—	—	—	—	—
5	18.5	17.5	16.1	12.5	13.3	4.8	6.9	29	2	13	8	—	—	—	—	—	—	—	—
6	22.9	21.8	20.5	15.5	13.3	4.9	7.5	11	2	21	14	—	—	—	—	—	—	—	—
7	27.3	26.3	24.8	18.9	13.6	4.5	5.9	20	—	17	20	—	—	—	—	—	—	—	—
8	28.6	28.0	26.8	22.1	14.1	4.7	5.9	22	—	18	22	—	—	—	—	—	—	—	—
9	24.7	25.0	24.3	22.6	14.7	4.6	8.1	5	5	13	10	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17.1	18.2	18.4	20.0	15.2	3.1	4.3	10	3	16	17	—	—	—	—	—	—	—	—
11	10.7	12.1	12.3	16.6	15.4	2.1	3.1	28	9	9	11	—	—	—	—	—	—	—	—
12	4.2	5.8	6.4	12.6	15.4	1.9	2.5	29	13	5	9	—	—	—	—	—	—	—	—
全年	14.7	14.9	14.5	14.7	14.3	3.3	8.1	5K	55	159	147	—	—	—	—	—	—	—	—

## 二、產 業

104

56

### 一 概 説

宇都宮市は、そのむかし小江戸の名を以て呼ばれ、奥羽地方の交通要路に當り、商工業もまた其の時代相應の盛賑を呈してゐた。

其の後戊辰の役の兵燹に罹りて商工業一時頓座を來したが、西洋文明の普及と共に復舊しつつあつた所、東北本線の開通により、商業の取引範圍狹まりて漸次生産工業衰へ、消費都市として附近縣下都市村落、市内の官衙公署等に對する小間屋、小賣商業の類多く榮えて、面目を保つて來たものであつた。

然るに近年に至り、時勢の推移ミ市街の發展に伴ひ、生産都市への轉向氣運濃厚となり、衰退の諸産業を挽回すべく、農業、工業、商業の諸方面に目覺ましい進躍をみるに至つて來た。

本市の勸業方針また銳意殖産に力を致し、宇都宮商工會議所の調査研究と共に、それら永遠の計畫に餘念なく、殊に近年自動車交通の發達は東京及近縣主要都市との聯絡を密ならしめ、原料、製品の輸送に便を與へてより、本市の工業的餘裕ミ、賃勞賃の低廉等に相俟つて益々産工業熱を加へ従つて商業も亦活氣を呈するになつてきた。

## 二 商 業

### 一、概 要

從來本市の商業は傳統的なる小賣商業の範圍を出でなかつたが、近年桐製品、染色工業、履物、傘、帯、菓子類、土産品等の生産業の勃興と共に、商業經營も亦著るしい進展を來し、交通の便を利用して商取引範圍を擴張せんとして販路開拓に努めて居る。

本市の勸業政策またそれらを擁護し、宇都宮商工會議所と共に商業諸般の調査研究に餘念なく、同業組合、商業組合、其他各種組合の内容を充實せしめて單獨經營より組織的經營の路を辿らしめ當業者の自覺と共に近年其の面目を一新するに到つてゐる。

### 重要品移出入調 (昭和七年)

種 別	縣 外		縣 内	
	數 量	價 額	數 量	價 額
内 國 米	三五〇,〇〇〇俵	三〇八,〇〇〇	一七〇,〇〇〇俵	一四九,〇〇〇
大 麥	一,一九八	八九八五	四一五二	三三,二〇八
小 麥	四一,九五五	二九,二二六	一,五九九	二七,五三三
小 粉	二五〇,〇〇〇斤	一〇〇,〇〇〇	三三,〇〇〇,〇〇〇斤	一,一五〇,〇〇〇

會社名	所在地	創業年月	主ナル業務	資本金又ハ
株式會社 栃木縣農工銀行	池上町	明治三十一年六月	特種銀行	二,000,000
株式會社 下野興業銀行	杉原町	大正二年十二月	貯蓄銀行	一,000,000
株式會社 福田商會	千手町	大正二年二月	普通銀行	六,000,000
株式會社 丸宮製麵商會	三條町	大正八年五月	米穀肥料雜穀	五,000,000
株式會社 三共社印刷所	今泉町	大正九年四月	大谷石材探掘販賣	三,000,000
株式會社 宇都宮魚市場	旭町二丁目	大正八年四月	活版石版印刷業	一,000,000
株式會社 山吉魚問屋	新宿町	明治四十三年九月	海產物委託販賣業	一,000,000
株式會社 宇都宮市場	大	大正六年四月	海產物委託販賣業	一,000,000
株式會社 宇都宮中央銀行	大	大正九年三月	普通銀行	一,000,000
株式會社 下野中央銀行	杉原町	大正十四年二月	普通銀行	一,000,000
株式會社 宇都宮瓦斯株會社	今泉町	明治四十四年十月	石炭瓦斯製造業	一,000,000
株式會社 宇都宮製氷株會社	今泉町	大正十年三月	製氷業	一,000,000
株式會社 宇都宮製氷株會社	今泉町	大正十年三月	製氷業	一,000,000
株式會社 宇都宮合同運送株會社	堀田町	大正十一年一月	鐵道運送業	一,000,000
株式會社 宇都宮合同運送株會社	堀田町	大正十一年一月	鐵道運送業	一,000,000
株式會社 宇都宮土地建物株會社	旭町一丁目	昭和二年六月	鐵道運送業	一,000,000
株式會社 宇都宮土地建物株會社	旭町一丁目	昭和二年六月	鐵道運送業	一,000,000
株式會社 宇都宮市街自動車株會社	新石原町	大正十五年九月	土地建物ノ賣買業	一,000,000
株式會社 宇都宮市街自動車株會社	新石原町	大正十五年九月	土地建物ノ賣買業	一,000,000
株式會社 宇都宮ボンブ株會社	小袋町	大正十年三月	自動車旅客運輸業	一,000,000
株式會社 宇都宮ボンブ株會社	小袋町	大正十年三月	自動車旅客運輸業	一,000,000

會社 (昭和七年)

市場名	常時ノ別設	賣買品目	所在地名	開市日	創始年
株式會社 山吉魚問屋	常設	鮮魚	宇都宮市大町	毎日	大正六年
同 宇都宮市場	同	青物	同 大町	同	大正九年
同 宇都宮魚市場	同	鮮魚	同 新宿町	同	明治四十三年
石炭		100,000,000斤			
石油		二,000,000箱			
木炭		三,000,000貫			
竹材		一,200束			
挽材		八,000坪			
丸太及角材		二,500石			
絹織		一,000,000			
絹交織		一,000,000			
木綿織		一,000,000反			
砂糖		九,一六,六五斤			
醬油		一,000,000			
酒類		二,000,000			

諸市場 (昭和七年) (會社組織ノモノ)

(註) 市場ハ魚市場二、青果市場一〇、計十二市場アレ共本市ハ中央卸賣市場區域ニ指定セラレ且ッ縣令ノ改正ニヨリ魚市場一、青果市場一二統一サル、見込



合資會社	いねや旅館	川向町	昭和七年七月	旅人宿業	≡000
合資會社	坂本石材店	川向町	昭和七年七月	石材採掘販賣業	≡000
合資會社	田中利三郎商店	川向町	昭和七年九月	米穀薪炭ノ賣買精米	10000
合資會社	丸慶運送店	川向町	昭和七年十一月	及之ニ附帶スル業務	10000
合資會社	和氣商會	日野町	大正十一年四月	運送業及運送取扱業	≡000
合資會社	栃木製紙所	戸祭町	昭和六年十一月	保險代理店業	10000
合資會社	東武宇都宮運送店	一戸條町	昭和六年八月	製紙業	10000
合資會社				運送業	≡0000

### 三 金 融

金融の如何は産業に直に影響されてくる。産業都市への轉向に腐心しつつある本市ではあるが動もすれば金融のそれに伴はずして有望なるものゝ衰退の運命を辿りつゝあるもの多々あるは最も遺憾とする所である。素より金融經濟關係は複雑にして其の詳細を知るに難けれども現在の宇都宮は同様金融難を稱されてゐる。

#### 1. 銀行利子 (昭和七年)

預金利子	定期預金	四分七厘	貸出利子(最)	九分二厘
特別當座預金	當座預金	五分五厘		
貯蓄預金	貯蓄預金	三分七厘	低	六分二厘

#### 2. 市内各銀行別手形交換高調 (昭和八年分)

銀行名	當座小切手枚数	交換高		約束手形枚数	約束手形額	爲替手形枚数	爲替手形額	預金手形枚数	預金手形額	其 他		
		本年	前年									
栃木縣農工銀行	66	59,914.90	—	—	—	—	—	—	—	603	210,500.71	
栃木農商銀行支店	3,033	851,250.24	209	229,318.32	80	29,072.33	71	31,545.22	72	20,355.30	123	20,489.18
下毛貯蓄銀行	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	388	412,310.95
第一銀行支店	5,615	2,882,700.70	645	803,703.88	473	281,899.54	483	268,721.12	66	61,060.25	116	72,756.74
安田銀行支店	7,743	6,081,230.77	1,171	879,865.50	903	289,764.33	405	285,687.72	—	—	7,461	4,454,029.33
足利銀行支店	7,165	2,185,288.56	1,045	832,426.30	437	200,052.26	198	95,698.29	—	—	379	1,548,978.88
合計	23,602	12,040,475.17	3,070	2,745,314.00	1,833	800,788.96	1,157	681,652.35	138	81,415.55	9,073	6,719,065.79
宇都宮郵便局	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6,434	579,396.68



3. 郵便貯金 (昭和八年)

預入 四、一二三、〇〇六、六一  
 拂出 四、三六〇、四五五、五七  
 年末現在高 五、〇二四、七六六、一九

簡易保険調

年次	被保険者數	契約金額
昭和八年	四三、九八〇	六、五六六、一七八
昭和七年	四一、四一三	六、〇七四、八七五
昭和六年	四一、四八一	六、一一一、二九一

各支店銀行 (昭和八年)

支店名	本店所在地	重役筆頭者	支店創設年月	總額	本拂込額
株式會社安田銀行宇都宮支店	東京市麹町區大手町一丁目	安田善次郎	明治十三年一月	一五〇,〇〇〇,〇〇〇	九二,七五〇,〇〇〇
株式會社第一銀行宇都宮支店	東京市麹町區丸の内一丁目一番ノ一	石井 健吾	昭和二年五月	五七,五〇〇,〇〇〇	五七,五〇〇,〇〇〇
株式會社不動貯金銀行宇都宮支店	東京市芝區宮本町三四	牧野元次郎	大正十三年九月	八,〇〇〇,〇〇〇	七,〇〇〇,〇〇〇
株式會社足利銀行宇都宮支店	足利市通三丁目	荻野万太郎	大正十三年八月	七,八〇〇,〇〇〇	五,三六〇,〇〇〇

株式會社足利銀行新石町支店	同	同	同	同	同
株式會社栃木農商銀行宇都宮支店	下都賀郡栃木町	安田善四郎	明治廿七年三月	一,〇〇〇,〇〇〇	六五〇,〇〇〇

四 工 業

一、概 要

工業業にみるべきものなかつた宇都宮市にも近年産業組織の發展と共に、工業業をもつて産業都市へ轉向の氣運をもたらすに至つた。のみならず本市は地理的に上町、下町に區分され、下町は地域の餘裕と、東北本線の交通は原料、製品、諸物資の搬出入に便を與へ、工場地帯とするに適してゐる。其他一般賃勞銀の低廉等企業上に恵まれたる好條件のみにみるべきもの漸次増加の傾向を示してゐる。

殊に本市を北南に貫流する田川の水質は染色に適し、宮染として東北方に販路を持つて居た。其後明治三十五年頃より中形の染色を創造し、その實質に名聲を博し發展しつゝあつたが不況等により、産額も減ぜらるゝに至つたので、現在では東京及關西方面の間屋筋と聯絡するに至りてより、圖案技術、其他種々改良せられて面目を一新するになつた。

木工業は本市附近及東北地方より多量に得られる桐材を以てする箆笥、火鉢其他指物、家具類の製作業やうやく盛になり、其の製品もまた埼玉、東京方面のそれに比して遜色無く、移出も試みられ販路の擴張を必要とする時期になつてゐる。

又履物類は豊富なる桐材と共に下駄甲良の産多く、駒下駄、中齒の類は關西、東北方面へ移出され、技術の進歩も相俟つて、今後斯業の發展目ざましきものあるべしとみられてゐる。

尙實用堅實なる番傘は冬季寒地の使用に堪える特質を持つてゐるので、東北、北海道方面に販路を持つてゐる。現在繪日傘、蛇の目等製作の合理的經營と技術の向上に努めてゐる。

箆類の生産は近年栃木、鹿沼と共に次第に産額を増加してゐる。針金編をもつて製され、實用に價格の低廉を以て盛に移出されてゐる。

製粉業は製麵業と共に近年著るしい發展を來し何れも近縣各地へ移出せらるゝ量尠くない。

又製紙工業は特殊なる化學用濾紙、ケント色紙及再生塵紙の産多く、鐵工業また近年其の技術と共に長足の進歩を示して來た。

特許水壓器は取扱の簡易と能率の優秀なるを以て名を博し、特許藥切器、農具類を始めし、其他の器械も産せられ漸く生産工業都市への曙光をみるに至つた。

特産工藝美術品として他の追従を許さざる瓢細工がある。自然の形狀を利用し、炭取、盆、火鉢お面等或は風流雅致に富む生花、盛花、投入用花器類等塗工業技術の向上と共に遠近各地へ販路が開けてゐる。

本市の瓢細工業は本市獨特のものにして、手工業的家内工業より組織生産へも轉向されつゝあるから將來大いに發展するものゝ一つであらう。

其他名高い鹿沼大麻を原料とした蚊帳は未だその産額尠いが實用的にして既に認められてきた。線香、懐爐灰等は家内工業又は副業として勃興し産額も尠くない。

綿織業は往時宮織又は宮木綿として名高かつたが現在は昔日に及ばず之が挽回に腐心してゐる。菓子類の製造は素晴らしい發達をみてゐる。日光羊羹、みやの餅を始めとして米菓、干菓子、其他數多の郷土みやげ品がある。

近年味噌醬油の産額も急に増加し、東京方面へ盛んに移出されてゐる。また貿易生産品としてスバルテリ―經木織がある。

以上は本市工業の概要ではあるが、交通運輸、賃勞銀の低廉、商業の發展も相俟つて今後益々進展するものと視られてゐる。

工場名	所在地	創立年月	主要業務	男	女	計
神野スバルトリ工場	旭町一	明治二十八年九月	經木織製造業	一〇	一	一七
宇都宮鐵工工場	旭町一	大正七年四月	鑄物製造業	三	一	四
谷村鑄物工場	旭町一	大正五年八月	鑄物製造業	九	一	一〇
福田印刷所	二條町	明治二十五年	活版印刷業	九	一	一〇
晃陽印刷所	池上町	大正十五年六月	石版印刷業	九	一	一〇
朝陽印刷所	池上町	明治二十四年四月	活版印刷業	九	一	一〇
小杉製麵所	堀田町	明治三十五年三月	乾麵製造業	九	一	一〇
藤枝工場	旭町二	明治四十一年六月	木綿縮織物業	一	一	二
明治屋サイター製造業	材木町	明治四十三年三月	清涼飲料水製造業	三	一	四
大島サイター製造業	宿郷町	明治四十五年三月	清涼飲料水製造業	四	一	五
室田農具製造所	石登町	大正九年六月	藥切機製造業	一〇	一	一一
小林團扇製造所	大登町	明治二十年三月	團扇製造業	一	一	二
中村味噌製造所	茂登町	明治十七年	味噌製造業	一	一	二
渡邊農具製作所	中河原町	明治三十九年三月	藥切機製造業	一	一	二
小林酒造所	西原町	明治二十七年三月	清酒釀造業	一	一	二
虎屋酒造所	池上町	天明八年十一月	酒釀造業	一	一	二
藤崎印刷株式會社	千手町	明治四十三年九月	活版印刷業	一	一	二
青源味噌工場	石手町	明治三十五年七月	味噌製造業	一	一	二
吉田金庫店	大工町	明治二十三年四月	金庫製造業	一	一	二
				八八	二六	一一四
				一	一	二
				八八	二六	一一四

工場 (昭和七年)

工場名	所在地	創立年月	主要業務	男	女	計
宇都宮瓦斯株式會社	今泉町	明治四十四年十月	石炭瓦斯製造業	元	一	元一
日清製粉株式會社宇都宮工場	今泉町	明治四十二年九月	小麥粉製造業	元	一	元一
下野印刷株式會社	杉原町	大正二年十一月	活版印刷業	元	一	元一
株式會社三共社印刷所	旭町二	大正八年五月	活版石版印刷業	元	一	元一
丸宮製麵商會	今泉町	明治四十五年七月	乾麵製造業	元	一	元一
宇都宮煎餅株式會社	旭町一	大正八年十二月	煎餅製造業	元	一	元一
宇都宮製米冷蔵株式會社	堀田町	大正十年三月	製米冷蔵保管業	元	一	元一
宇都宮製木材株式會社	堀田町	大正十一年一月	製材業	元	一	元一
宇都宮金網合資會社	堀田町	大正十一年一月	金網製造業	元	一	元一
宇都宮製油合名會社	西大寬町	明治四十一年二月	各種植物油製造業	元	一	元一
下野新聞株式會社	今泉町	明治三十四年七月	新聞紙發行業	元	一	元一
下野製紙株式會社	池上町	明治三十五年八月	新聞紙發行業	元	一	元一
下野日々新聞社	宿郷町	明治三十八年三月	新聞紙發行業	元	一	元一
東洋濾紙株式會社宇都宮工場	堀田町	明治二十三年十月	濾紙製造業	元	一	元一
關山製緒株式會社	西原町	大正九年七月	鼻緒製造業	元	一	元一
日本鑛泉株式會社	上河原町	大正十一年十一月	清涼飲料水製造業	元	一	元一
會社ミヤコ自動車修繕工場	西原町	昭和二年六月	自動車修繕業	元	一	元一
				三三	六三	九九
				一	一	二
				三三	六三	九九

種別	製造戶數	職工數		價額
		男	女	
履物 (素地)	11	1	1	7,000
挽物	2	1	1	2,300
曲物	1	1	1	3,600
計	14	3	3	12,900

晒及染物

年次	戶數	職工數	價額
昭和七年	11	1	3,940
昭和六年	12	1	3,490
昭和五年	11	1	2,610
計	34	3	10,040

木製品 (昭和七年)

年次	戶數	職工數	價額
昭和七年	11	1	3,940
昭和六年	12	1	3,490
昭和五年	11	1	2,610
計	34	3	10,040

製材工場 (昭和八年)

工場名	所在地	動力種類
丸中製材所	宇都宮市西原町	電力
大正製材所	宇都宮市西原町	電力
合名會社戸祭製材所	戸祭町	電力
宇都宮木材株式會社	瑞田町	電力
宇都宮木材株式會社	西原町	電力
宇都宮木材株式會社	川向町	電力
向工場	清住町	電力
猪股製材所	瑞田町	電力
佐藤製材所	瑞田町	電力

工產物 (昭和七年)

種別	數量	價額	職工數
鐵製鍋釜及鐵瓶類	1	6,500	1
雙及物類	1	2,000	1
扇子及團扇	1	2,000	1
紙器	1	2,000	1
傘	1	100,000	1
乾葉	1	100,000	1
麵子	1	3,500	1
油	1	3,500	1
醬	1	3,500	1
下駄	1	170,000	1
緒	1	170,000	1
紙	1	265,000	1
美濃紙	1	227,750	1
其他紙	1	227,750	1
計	1	2,097,000	1

藁製品 (昭和七年)

品名	製造戸數	職工數		計數	數量	價額
		男	女			
飲食用器物	七戸	八	一	八	一	七,五〇〇
工業用品		八	一	八	一	七,〇〇〇
其他		八	一	八	一	七,〇〇〇
昭和五年						七,〇〇〇
昭和六年						七,〇〇〇
昭和七年計						七,五〇〇

陶磁器 (昭和七年)

種別	製造戸數	職工數		計數	價額
		男	女		
飲食器	三	七	一	八	四三,〇〇〇
家具及裝飾品	三	七	一	八	二九,〇〇〇
其他	三	七	一	八	七,三〇〇
昭和五年					五三,四〇〇
昭和六年					七,一〇〇
昭和七年計					七九,三〇〇

漆器 (昭和七年)

種別	製造戸數	職工數		計數	價額
		男	女		
籠篋及	五	六	一	七	三〇,〇〇〇
行儀	五	六	一	七	三九,七〇〇
バスケツト	五	六	一	七	三,二〇〇
李	五	六	一	七	二,〇〇〇
昭和五年					三二,一〇〇
昭和六年					三七,六〇〇
昭和七年計					三九,七〇〇

竹製品 (昭和七年)

種別	製造戸數	職工數		計數	價額
		男	女		
指箱	三	五	一	六	三八四,〇〇〇
木桶	三	五	一	六	五五九,三〇〇
樽	三	五	一	六	五七五,九〇〇
箸類	三	五	一	六	二,〇〇〇
昭和五年					五四七,一〇〇
昭和六年					五四九,三〇〇
昭和七年計					一,〇七二,〇〇〇





種別	戸數	職工數		計數	製造量	價額
		男	女			
菜種油	三			三	一五,五〇〇斤	三,七〇〇
胡麻油	三			三	一七,〇〇〇	五,〇〇〇
其他油	三			三	一四,五七五	三,一八〇
計	三			三		八,〇〇〇
昭和五年	三	一五		一五		七,一〇〇
昭和六年	三	一五		一五		七,一〇〇
計	三	一五		一五		七,一〇〇
昭和五年	三	一五		一五		七,一〇〇

植物油 (昭和七年)

種別	數	量	價額
其他	一	一五,〇〇〇	四三,五〇〇
計	三三三	四八,〇〇〇	一四二,〇〇〇
昭和五年	一	一五,〇〇〇	四三,五〇〇
昭和六年	一	一五,〇〇〇	四三,五〇〇
計	二	三〇,〇〇〇	八七,〇〇〇

水産製造高 (昭和七年)

品名	製造戸數	職工數		計數	數量	價額
		男	女			
靴	五			五		三〇,八〇〇
馬具	五			五		三〇,八〇〇
計	五			五		六一,六〇〇
昭和五年	五	二五		二五		一六,三〇〇
昭和六年	五	二五		二五		一六,三〇〇
計	五	二五		二五		三二,六〇〇

皮革製品 (昭和七年)

種別	數	價額	職工數	
			男	女
サイダ	一,二五七	八五,八九〇		
ラム	二,七六〇	四九〇		
ソム	五,九六六	二九八	一〇	一〇
果實	二七,四三五	四,三四〇		
計	一,二五七	八五,八九〇	一〇	一〇
昭和五年	一,二五七	八五,八九〇		
昭和六年	一,二五七	八五,八九〇		
計	二,五一四	一七一,七八〇	一〇	一〇

清涼飲料水製造高 (昭和七年)



製 茶

年次	製造戸数	量	價	額
昭和七年	一六戸	一、九五〇		八、四〇〇
昭和六年	二〇	二、四〇〇		一二、七八〇
昭和五年	二〇	二、四〇〇		一二、七八〇

煙草製造高 (昭和八年)

製 品 名	生 産 高	價 額	年 末 現 在 職 工 數	
			男	女
朝 日	四八、四四〇	三、六六三、三〇〇		
あ つ ぎ	二六、一四五	一、五二、二五〇		
は や ぎ	六二、五〇五	三〇三、六一五	二二	四四三
な ぎ	三六、三〇八	七〇四、四八		
計	七〇六、二六八	一、五九四、四七六	二二	四四三
昭和七年		六、四八、〇七九	二二	四四三
昭和六年		六、八七、九六七	二二	四四三
昭和五年		七、一八三、八〇四	二二	四四三

五 農 牧、水 産

一、概 要

本市の農業は市街の發展膨脹ニ陽西、陽南の各土地區劃整理組合の事業完成及工業の振興に伴ひ耕地は漸次住宅地、學校、會社、工場及其他の敷地に變換されて減少しつつあるが、却つて市農會の指導方針の下に優良なる耕地の利用栽培ニ技術の向上によつての栽培及園藝等にもみるべきものがある。

殊に本市及附近より生産せらるる白菜、太葱類は良く氣候風土に適し、其の優良なる品質に名聲を博し東京、關西方面へ出荷されるに至つて來た。

尙西瓜、ホーレン草、ニンジン、茄子、胡瓜、蕃茄の類及び小麥、ビール麥等の産額も多く、本市はそれらを各地へ夫々集散しつつある。

牧畜業はあまり振はずして牛、馬、豚其他家畜類本市の需要を充たすに不足の状態にある。

水産業に至つては水に恵まれては居ないが、鰻、鯉、金魚類を養殖する養魚場水利を利用して点在し、近年わづか乍ら移出される様に爲つて來た。



種別	樹	數	收穫高	價	額
梅		二,二〇〇	一〇〇	一〇〇	一,一〇〇
桃		一,一五〇	三,二五〇	一〇〇	一,一五〇
枇杷		三五〇	一五〇	一五〇	一,一五〇
梨		三五〇	九〇〇	一五〇	二,九七〇
柿		一,四〇〇	三,〇〇〇	八〇〇	一,一〇〇
葡萄		一〇〇〇	八〇〇	一〇〇	一,一〇〇
計		五,二三五			三,五七二
昭和五年		五,三八〇			二,九六三
昭和六年		五,四九〇			三,三五〇

果實 (昭和七年)

種別	作付反別	收穫高	價	額	一反步當收量
昭和五年	七〇	二,四五〇	八,五七五	三五	三五
昭和六年	七五	二,六二五	七,八七五	三五	三五
昭和七年	六二	二,二二二	三,三四八	四	三六

干瓢

種別	作付反別	收穫高	價	額
大麥	二二七	六,一七〇	四〇	四〇,二〇五
小麥	一〇〇	二四	二五	二,五二〇
計	三二七	一,六八〇	二四	二五,二〇〇
昭和五年	三四五	六,四六六	四四	四四,九四六
昭和六年	三四五	六,二一九	四四	四四,九四六
昭和七年	三四五	六,四六六	四四	五二,七一九

麥 (昭和八年)

種別	作付反別	收穫高 (玄米)	價	額
水稲	二,七一八	五,五七二	一〇	一,一四四
陸稻	三,三四	六五	一〇	一,三〇〇
計	三,一〇六	五二一	一〇	八,八五七
昭和五年	五,九〇〇	一〇,七三三	一四	一四,〇九一
昭和六年	五,八八二	八,五一一	一四	二二,三九四
昭和七年	三,七八三	七,二三一	一四	一四,四二二

米 (昭和八年)





種別	業計		副業計		業計		副業計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
漁撈業者								
養殖業者								
製造業者								
計	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六
昭和五年								
昭和六年								
昭和七年								
計	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六
昭和五年								
昭和六年								
昭和七年								
計	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六

水産業者 (昭和七年)

年次	種別	頭數	斤數	價額
昭和五年	同	一	一〇五	四七
昭和六年	同	一	一〇五	四七
昭和七年	羊	一	一〇五	四七
計	同	三	三〇五	一四一

年次	屠場數	種別	頭數	斤數	價額
昭和七年	一	成牛	三三	三,一三一	一三,六九九
昭和六年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和五年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和七年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和六年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和五年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和七年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和六年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
昭和五年	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六
計	一	同	三三	三,〇九四	一三,〇〇六

屠殺

種別	飼養戶數		成食數		雛數		個數		價額	
	未滿十羽	十羽以上	羽數	價額	羽數	價額	個數	價額	計	
鷄	五七	一六	七,九一〇	七,五八五	七,五二四	三,〇〇六	一,六二七	一,六八〇	四八,五三〇	五九,二二二
鶩	八	一	四〇〇	五五五	七四	二五	一四	二三五	四八,五三〇	一,一四九
計	五八	一七	八,三一〇	八,一四〇	七,五九八	三,〇三一	一,六三一	一,九一五	九三,〇六〇	六〇,二七〇

水産養殖

年次	種別	養殖場數	同上面積	收獲		高	額
				數	量		
昭和七年	鯉魚	一八	二四、〇五〇坪	三、五〇〇	一、八七五	坪	一、八七五
昭和六年	鯉魚	一八	二四、〇五〇坪	三、二〇〇	一、六〇〇	坪	一、六〇〇
昭和五年	鯉魚	一八	二四、〇五〇坪	三、〇〇〇	一、七五〇	坪	一、七五〇

六 交通運輸

一、概 要

本市の交通運輸は近年自動車交通の發達と商工業の興隆により著しい發展を來してゐる。地理的に本市は往古より交通の要路に當り、東京より一〇五軒九分、約二時間にて達し、東北本線を通じて遠く青森方面の各地へ聯絡し、また支線を以て日光に聯絡し、鶴田驛よりは貨物線を出し郊外名勝地へ通じ、防火を以て有名なる大谷石材を運搬してゐる。

更に東武電車は市の中心より淺草雷門百貨店松屋の階下に通じ、栃木驛を経て日光、鬼怒川の各名勝温泉地を聯絡してゐる。

道路は奥州街道の國道、本市に入るに及び舗装工事を施されて美觀を呈し、市の南端より直線に北へ進み、右廻りして市の中心街をなし更に北進して奥羽の各地へ通じてゐる。府縣道は國道を幹線として四通八達し、近縣下の各主要都に通じてゐる。市道また國府縣道を遺憾なく連絡する様建設され、交通の便と市街の發展に寄與してゐる。

自動車業に至つては近年著るしき發展を示し、整備されたる各路線を運轉してゐるの外、乗合、貨物等日光、鹽原、鬼怒川、福島縣下南會津田島其他茨城、群馬、埼玉は勿論遠く仙臺、東京方面へ國道を介して定期貨物自動車の便もある。

また鐵道省に於ては本市より茂木間省營バスを運轉し、更に御前山を経て常盤線に、烏山、馬頭を通じて茨城縣大子町に連絡し、茨城東海岸よりの交通網を計劃しつゝあると聞く。

嘗て往古驛次として繁榮を來たし、交通に恵まれてゐたこと云ふ我が市ではあるが、時代の趨勢に鑑み、これらの交通機關を産業生活上に取り入れて、本市商工業發展に利用せんとしてゐる。





大	雜	落	甘	馬	野	甘	菓	菓	木	木	薪	石	砂	塊	粉	金	銅	鐵	其	
豆	穀	生	薯	菜	橋	物	品	材	炭	炭	利	材	炭	炭	ス	鑛	鑛	鑛	鑛	他
二〇	五九	六四	四〇	八	二,〇三二	八	六〇	六三	三九	一四	七二	四六	六	六	三	一,七七九	一五	一五	一五	一五
八	三	八	八	七五	一〇二	四三	一〇二	四三	一〇二	四三	一〇二	四三	一〇二	四三	一〇二	一五	一五	一五	一五	一五
二,一四八	一,六二八	二四	一〇六	一〇六	一,四六九	五三四	八四六	七	一,一六三	四,五三四	六三五	一,二六六	一〇,〇八八	四,〇四五	一,〇〇一	一五	一五	一五	一五	一五
二,一九五	一,七三二	一六	一〇六	七六	一,五八六	七六九	九八八	七	一,五九九	五,一四四	四三六	八七三	八,四四一	三,九五七	九〇六	一五	一五	一五	一五	一五
八九	四	三	一七	一三	四九	一三	六	一	一九	七五	二	六	一	一	一	一	一	一	一	一
八五	二	二	三	二	三	二	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三三	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

種別	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年
麥	一三,三五三	一四,四二〇	一,五三六	一,七〇六	五〇三	六六三	一三三	一〇三
米	五,九四五	三,三九七	三,三三四	三,一七〇	四七六	三九三	九〇	四四
和計	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
昭和七年	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
昭和八年	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七

宇都宮驛貨物取扱數量調 (昭和八年)

種別	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年
發	一三,三五三	一四,四二〇	一,五三六	一,七〇六	五〇三	六六三	一三三	一〇三
送	五,九四五	三,三九七	三,三三四	三,一七〇	四七六	三九三	九〇	四四
到	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
扱	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
發	一三,三五三	一四,四二〇	一,五三六	一,七〇六	五〇三	六六三	一三三	一〇三
送	五,九四五	三,三九七	三,三三四	三,一七〇	四七六	三九三	九〇	四四
到	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
扱	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七

種別	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年
發	一三,三五三	一四,四二〇	一,五三六	一,七〇六	五〇三	六六三	一三三	一〇三
送	五,九四五	三,三九七	三,三三四	三,一七〇	四七六	三九三	九〇	四四
到	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
扱	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
發	一三,三五三	一四,四二〇	一,五三六	一,七〇六	五〇三	六六三	一三三	一〇三
送	五,九四五	三,三九七	三,三三四	三,一七〇	四七六	三九三	九〇	四四
到	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七
扱	一八,三〇八	一七,八一七	四,八七二	五,四一二	九七九	一,〇五六	二二三	一四七



電信發着數調

年次	國內		國外	
	發	受	發	受
昭和八年	三七, 三六五	八三, 二五六	一五八	四一九
昭和七年	五〇, 七三七	八四, 九四八	三二一	四九二
昭和六年	五二, 六五〇	八七, 二九七	六九	一〇六

郵便物發着數調

年次	普通郵便物		小包郵便物		書留郵便物	
	發	着	發	着	發	着
昭和八年	七, 五四六, 〇二一	七, 六八七, 八五二	四三, 四八七	一〇九, 八二八	五〇, 七三一	一五三, 八九八
昭和七年	七, 四三三, 〇八二	七, 七二二, 八八九	五〇, 一三五	一〇一, 三〇一	五四, 〇三三	一五四, 一三三
昭和六年	六, 五二〇, 二六四	六, 七九五, 四二〇	四三, 〇二六	一一二, 三五七	五二, 八八二	一五六, 六五一

郵便切手類賣捌高調

年次	切手		葉書	
	枚	金額	枚	金額
昭和八年	一〇, 六九九, 六三三	四三七, 七七三	一一, 〇四四, 二七六	一六三, 〇五五
昭和七年	一〇, 五五四, 一〇三	四四二, 三七〇	一一, 〇三八, 九二四	一七五, 七四八
昭和六年	一〇, 一九〇, 九六九	四三八, 三六〇	一一, 二〇五, 九六二	一七八, 二五〇

收入印紙賣捌高調

年次	枚		金額	
	數	金額	數	金額
昭和八年	一, 五〇八, 〇二一	一, 五〇八, 〇二一	五〇, 七三一	一五三, 八九八
昭和七年	一, 四二一, 〇六〇	一, 四二一, 〇六〇	五四, 〇三三	一五四, 一三三
昭和六年	一, 六〇九, 八九五	一, 六〇九, 八九五	五二, 八八二	一五六, 六五一

馬干菓漆其  
子器他  
計ノ

年次	馬干菓漆其		子器他	
	枚	金額	枚	金額
昭和八年	二七	一〇七	二七	一〇七
昭和七年	八	六四	八	六四
昭和六年	二七	一〇七	二七	一〇七



## 一 御 聖 跡

(1)、明治天皇御遺跡……(2)、御聖跡

## 一、明治天皇御遺跡

皇政維新明治元年五月、下總野御鎮撫執事の名に依り皇室中興聖業祈望の布告に

「下野國タルヤ古皇朝御盛之時者、宮様方ヨリ御鎮守被成候程ノ重キ國柄候處、久敷武家ノ私恩小惠ニ固著シ大義ヲ令失却、妄ニ官軍ニ抗シ、或者王土ヲ掠メ、一揆徒黨等相結ビ、小民ヲ蠱惑スルニ至ル、今般奸ヲ除キ候上者、忠良ヲ擧ゲ、老人ヲ尊ビ、孤獨ヲ恤ム等ノ事モ漸々可被相行云々」とある。

下總野は關東の諸國を指したもので、殊に下野國は豐城入彦命以來皇子神孫は地方制治に與り、宇都宮は命より諸別王に至る永い間の御尊靈を、二荒山神社として奉祀し古來から皇家に關係する深い御縁があつた。

元來僻遠の地であつたため、鳳輦を親しく御迎へ奉る光榮に浴したこゝが無かつたが、明治大帝陛下の御東巡により報へられた。

## 二、御 聖 跡

明治九年六月五日明治大帝奧羽御巡幸の御宇都宮に御着、行在所を鐵炮町鈴木久右衛門宅に充てさせられ、同日午後五時御出門、舊城趾内東京鎮臺分營に臨御調練天覽の光榮に浴し、六日午前七時御發輦日光へ行幸あらせらる。

九日午後二時再び行幸を仰ぎ、十日御駐輦、十一日午前七時奧羽地方へ御發輦あらせられた。

明治十四年八月二日山形、秋田、北海道御巡幸の次を以て再び宇都宮へ御着、行在所を鈴木久右衛門宅に定められた。三日市外白澤へ臨御あらせられ、御乘馬にて、勝山城趾へ御成り、鬼怒川河畔にて、陸軍大演習を御統監あらせられ、五日北海道へ向けて御發輦あらせられた。

北海道の御巡幸を終らせられて御還幸の途次、蘆野町より御乘馬にて、明治十四年十月八日三日目の御幸を仰ぎ、鈴木久右衛門方を行在所と定められ、九日午前七時小山町へ向けて御發輦あらせられた。

明治二十五年十月二十一日、陸軍特別大演習御統監のため宇都宮市へ行幸あらせらる。縣廳を大本營と定められ、二十三日には氏家、二十四日市外平出原、二十五日市内今泉町に行幸あらせられ、二十六日には平出原にて觀兵式及分列式を行はせられ、舊城趾本丸にて群臣を御召になり醜を

賜ひ二十七日御還幸あらせられた。

明治三十四年十一月六日陸軍特別大演習御統裁のため仙臺市へ行幸あらせらるゝ御途次、栃木縣廳に行幸の光榮に浴し、翌七日仙臺市へ行幸、同月十一日仙臺市より御還幸の御途次再び栃木縣廳に鳳輦を迎へ、十二日宮城へ御還幸あらせられた。

明治四十二年十一月五日東毛東北の野に陸軍特別大演習御統裁のため宇都宮へ行幸あらせられた。再び栃木縣廳を大本營と定められ、六日には那須村、七日矢板町、九日阿久津村、十日寶積寺にて御統裁遊ばされて十一日御還幸あらせられた。

かくして行幸の光榮に浴すること實に六度、聖跡として大本營たる栃木縣廳を始めとして、行在所一、賜酺の地二、御野立所二、都合五ヶ所の多きに及んでゐる。

行在所 市内鐵炮町 向明館

明治九年、同十四年の兩度に御駐蹕あらせられた、行在所（鈴木久右衛門宅）は大正十四年八月市に於て買収し、向明館と稱へ永く保存することになつた。

賜酺之處 市内旭町 御本丸内

明治二十五年十月、大演習を畢へ、文武百僚、縣下官民五百餘名に酺を給はられし跡にて、高

さ一八尺、幅九尺餘の碑を建て、表面には有栖川宮威仁親王の御揮毫の七字を刻み

『天皇親臨賜酺處』

背面には東宮侍講正四位勳三等文學博士三島毅の撰文にして内大臣秘書官兼小松宮家令從六位勳六等日高秩父の書に成る碑文がある。

賜酺之處 市内中河原町

同じく内外百僚及地方官民八百餘名に酺を給はつた處。今や大藏省の所管に屬してゐる。大正五年煙草製造工場の建築なるに同時に、記念すべく御影石にて方尖形の角柱が建てられ、表面に銅金文字を嵌入し、題して

『大演習玉座遺跡』

背面には維時明治四十二年十一月と刻してある。

御野立所 市内西原町字瀧

有栖川宮熾仁親王の御揮毫を請ひて記念碑が建てられてある。

『天皇駐蹕之所』

明治二十六年四月 陸軍大將 熾仁親王

御野立所 市内今泉町

記念碑が設けられ陸軍大將正三位勳一等功二級男爵鮫島重雄の揮毫に係る文字が刻されてゐる  
『明治四十二年十一月十日 明治天皇御野立所』

二 觀光案内

- (1) 國幣中社二荒山神社……(2) 八幡宮……(3) 八坂神社……
- (4) 浦生神社……(5) 招魂社……(6) 勅旌碑……(7) 國寶阿彌陀如來像……(8) 國寶鐵塔婆……(9) 宇都宮城趾……(10) 奥平内藏允の墓……(11) 傳説の釣天井……(12) 一の丸の大櫓……(13) 三の丸の大銀杏……(14) 白ヶ峯……(15) 花尾崎……(16) 鏡ヶ池……(17) 求食沼……(18) 鴛鴦塚……(19) 七木七水八河原……(20) 三藏山の古墳……(21) 八幡山公園……(22) 軍道の櫻

一、國幣中社二荒山神社

本市中央の高阜『白ヶ峯』の頂きに鎮座してゐる。祭神は豊城入彦命である。命は崇神天皇の長皇子にして、勅を奉じ東國地方を治め給ひ、大に功德を施して王化に浴せしめ給はつた。命薨去して、國民其の御遺徳を景慕して、其威靈を奉祭したものである。

別號宇都宮と稱し、下野『一の宮』にして(地名之より起る)往古より朝廷の尊敬深く、延喜式には『下野十一座(大一座、小十一座)河内郡一座二荒山神社』と録せられ、四周の田千町を神封とせられて居た。尙それらは國司檢察をも加へられず、朝廷頼りに神階を進められ、武將もまた大に崇敬して居た。

藤原秀郷は甲冑、太刀、弓箭の類を奉納し、源頼義、義家の父子は奥州出征の際戦捷を祈り、源頼朝は治承四年、久能、大井出の二郷を御燈油料として寄進した。

元暦元年再び奉幣して天下泰平を祈り、更に文治五年、藤原秀衡を討つに當つて奉幣し、その凱旋に際しては、劍、神馬、神寶を奉納して報賽の意を表した。

建仁三年源實朝は宿禰の報賽に神馬を奉り、慶長五年徳川家康は千五百石餘を寄進して役を免ぜられ、同十年奥平家昌をして社殿を造營せしめた。

其後安永二年及天保三年、火災に罹つたが再び造營して復舊され、社殿樓閣等宏大壯麗を極めて居たが明治元年戊辰の兵燹に罹り、總て烏有に歸してしまつた。

同十年漸く建築成つたが、その壯宏は昔日に及ばない。  
明治五年國幣中社に列せられ、翌年改めて縣社になつたが、明治十六年五月再び『國幣中社』に

復せられて現在に至つてゐる。

### 二、八幡宮

宿郷町に在り、祭神は應仁天皇であらせらる。天喜年間、鎮守府將軍源賴義、奥州征討の際、宿郷に滞在して、草結の寶殿に参拜し賊徒の討滅を祈つた。戦捷を得て凱旋し社殿を造營したのに起原してゐる。傳へられてゐる。市内に於ける由緒正しい古社の一である。

### 三、八坂神社

今泉町にあり、天照大神、素戔鳴命、國常立命を祭神とされて居る、宇都宮氏の首祖「宗圓」の建立に係るものにして、神明宮に八坂神社外敷社を併せて八坂と改め、幣饌料供進社に指定されてゐる。

神明宮は境内二十四社を有ち、社領五百石を有する大社であつたが、次第に減少して、社殿亦頽廢したのを延徳年間に再興した、降つて明和九年、天保五年の兩度類焼に遭ひ、其後宇都宮領民の寄進に依りて回復したが、明治元年兵燹に罹り、明治二十九年に至りて本殿を造營したるも規模舊に復するに至らない。

城主戸田忠貞、崇敬して社領を寄進し、松平主殿頭忠祇もまた扁額を獻じ、華表を建つる等、古

き歴史を有する古社である。

### 四、蒲生神社

埴田町、三藏山にある蒲生神社は、本市が生みたる幕末の偉人蒲生君平先生を祀つてある。土地高燥雄大にして市街を一時に收め八幡山公園地に接して其の眺望頗る良い。

畏くも本社創立の計劃微聞に達し、大正十一年五月十二日金七百圓御下賜の御沙汰を拜受した。爾來關係者一同極力寄進募集に努めて大正十四年六月起工し、社殿、瑞垣、鳥居、拜殿、社務所等の完成を見、その崇高さと共に曾王の大義を遠く千歳に残してゐる。

### 五、招魂社

二荒山神社の境内に屬してゐる荒尾崎と稱されてゐる丘上に鎮座してゐる。明治五年十月宇都宮藩主戸田氏並同藩士及領内有志者に依りて社殿を造營せられたるものである。

祭神は贈從三位戸田忠恕を首め、明治戊辰の戦亂の際國難に殉じたる藩兵九十七名であつたが、其後西南戦役、日清、日露、臺灣土匪討伐、日獨戦役後近くは滿洲事變等の名譽の戦死者一千六百六十有餘名の英靈を合祀され、明治七年より官祭を營まれてゐる。

### 六、勅旌碑



明治皇政維新の二年十月、朝廷は志士蒲生君平先生の遺功を追賞して「里門旌表」の命を宇都守藩に下された。

時の藩知事戸田忠友早速奉行して、その地を南西郊（現在宇都宮市内南新町）東京街道國道に選定して、これが碑を建てられた。

碑の正面には『勅旌忠節蒲生君平里』の九字を刻み右の側面には「宇都宮藩知事戸田忠友奉行」左側面には「明治二年己巳冬十二月藩文學教授戸田誠謹書」と刻してある。

此の勅旌と同時に、子孫三人に扶持を賜はつた。明治九年六月 明治大帝奥羽御巡幸の途次躰を碑前に駐められ給ひて、特に御祭案を下賜せらるゝの光榮に浴した。

明治十四年五月特旨を以て正四位を贈られた。

### 七、國寶阿彌陀如來像

西原町一向寺に安置されてある。銅鑄の座像にして丈三尺四寸、上品上生の尊容である。

左の肩には「見彌陀身、必離三惡道、何況造三者、決定成菩提、第二願、大檀那藤原滿綱、一向寺發起忍上人」を始め全身に四百七十一文字が衣の全體に涉つて刻んである。所謂四十八願第二の願文であらう。

背後には應永十二年乙酉四月宇都宮滿綱銘されてある。

も正四位左近衛少將下野守藤原滿綱を大檀那として、下河原に建立された「西光山阿彌陀院長樂寺」の本尊であつたが、城地擴張の際、地藏寺と共に現在の一向寺畔に移され、之が廢滅の後一向寺によりて保存されたものである。

此の如來像は、時宗門に屬する全國の寺院中唯一の國寶であるを稱されてゐる。またこの像は時々（物理作用により）濕潤を帯びて、さながら發汗の狀を呈することがある。『汁かき阿彌陀』と稱されて有名である。

### 八、國寶鐵塔婆

清水町清巖寺の境内にある。此の卒塔婆はもも、宇都宮第八代の城主下野守兼三河守備後權守藤原貞綱、母の十三回忌菩提のため正和元年壬子八月、東勝寺に建立せるもので、其後慶長二年、東勝寺廢滅のとき、清巖寺に移された。

塔婆の高さ 一丈八寸五分

幅 一尺

厚さ 二寸

重量 五百斤

上部には二個の梵字があり、中部には彌陀三尊來迎の圖が鑄付られ、法、報、應の三身、青、白金の三色を表はし、無邊の功德茲に攝するの意を寓してゐる。

下部には菩提心論にある四句の偈が鑄られ、

「八葉白蓮一時間、炳現阿守素光色、禪智俱入金剛得、召入如來寂靜智」

更にその下に碑文がある。

「夫母者四恩之先也、孝者百行之源也、因茲當一十三之忘景、營卒都婆之治鑄、彌陀之種子三尊之聖容等、祈先妣之菩提、則仰諸佛之照覽、早出六趣之苦域、速生九品之淨臺、乃經法界平等利益」 敬白

孝子

正和元年壬子八月 日

星霜六百有餘年の歲月に暴露されたため、碑面は錆蝕し、古色蒼然として字體自ら模糊にしてゐる。明治四十四年稀有の卒塔婆として國寶に指定された。

### 九、宇都宮城址

僧宗圓の城く所にして康平六年下野守護職に補せられ、宇都宮社務職を兼ね、爾來子々孫々其の

職を襲ぎ、二十二世國綱に至り罪ありてその封土を沒收せられた。

以後城主の更迭は沿革に記した通りである。明治四年四月廢藩置縣の制にも、城地は陸軍省の所管となった。同五年十一月鎮臺を置き兵營が建設されたが、同十七年鎮臺が廢され二十二年縁故拂下が許可となり、城地を分割して舊城主戸田氏並本市の所有となった。

爾來城堡を拓き、濕地を填め、道路を開いて交通し市街の發展に便にした。官衙、公署、商店、工場等續々建設され昔時の形跡を失つた。

只本丸の一部を填め残されたる内外濠が満々水を湛えて往古の宏大を誇つてゐるだけである。

### 一〇、奥平内藏允の墓

寛文八年二月十九日、城主奥平美作守忠昌卒去したるため、興禪寺にて其の葬儀を営むだ。

家臣杉浦兵衛は追腹を切り、家老の奥平隼人、奥平内藏允は燒香の諍から及傷に及んだ。内藏允は殺されて隼人は逐電をしてしまった。これらにより家中の大騒動を惹起し、一家斷絶の危きに瀕したが、削封の上山形へ移された。

一方内藏允の遺骸は興禪寺に葬られ、其の子傳八郎及び傳藏等は隼人の行衛を搜索して、終に江戸牛込の淨瑠璃坂にて斬り父の仇を報じた。

## 一一、傳説の釣天井

## (一) 本多正純と根來同心

徳川家康は元和二年(二千二百七十六年)四月薨じければ、元和八年は其七年忌に當れり、元和七年十二月のこゝなりしが、來年四月十七日の祭日には日光山に詣ずるの豫定日を定めらる。宇都宮城主本多正純に命じ其準備をなさしむ、正純は近年幕府の信用厚く拔擢の御召にて十五萬石の大身となり、將軍日光御參社については其居城宇都宮城を御旅館に當てらるゝこゝとなり、されば殿閣は殊更他の舍門も悉く華麗結構に修理し以て鄭重に饗し奉らん。元和七年より其修理を急ぎ晝夜數萬の工夫を促し營作したり、外廓、二ノ丸、三ノ丸は堅固に成功し、巨廳宏敞し、姦民の防備せらる。其家に附屬せられたる根來足輕同心百人ばかりあり、斯る急劇なる大修理なれば家人等は一人も残らず召し集めて役事に従ふこゝせり、彼の根來同心の百人も皆其役に出ずべし命じければ、彼等は横着にも、我々は公より軍用の爲め御附屬ありし所にて私の役に従ふべきにあらずして、公の威を荷ひ上を犯し無禮の事のみ多かりけり。(徳川實記)

城主本多正純大に憤るゝ雖も考ふる所ありて其儘に過せり、されど彼等の横暴日に増長しければ本多は意を決し追討せん。企てたり、然れども彼等若し百人徒黨を結びなば如何なる騷動に及ぶやも知れざれば、人数を分散させて召捕るべきの計をなせり、依つて太鼓門の前に三日月形の堀を新に掘るべき事を申付たり、然るに彼等は士民の業我々の當る所にあらず、殊に一切手馴れざるこゝなれば、領地田方檢見して廻村致すべしとて、僅かばかりの供人にて東西に分散させ追々捕手の人数を遣はして彼等を容易に召捕れり、捕へし後は直に竹林へ引連れ、彼等の罪狀を一々讀み聞かせ、斷罪に行ひ梟首にかけたり。(志料)

宇都宮市外豊郷村大字竹林に大墳墓あり、畑中に碑あり、其墳墓を根來塚といふ。此根來塚は彼の百人の根來同心を埋めし所にして、其側に供養塔を建てたりしが今は畑地となり、塔は雨露に曝され香焚くものもなく花一枝手向ける者もなく、寂寞として其當時を語り。

又當宇都宮先代城主たりし奥平美作守忠昌が母は當代の姉君におはせしかばこゝさら優待せしかば、自ら威權も強く、其上性質も雄々しければ、先に宇都宮城より古河へ移られし時藩士等に命じて、宇都宮城藩士が居宅の竹林まで悉く伐りせらせ、家財、戸障子、戸板まで皆古河へ引取らせしめたるを、本多正純は大いに憤り、是れ轉封の大法に背くものなりとて國境に新關を設けてこれを押へ止めて引き返しければ、彼の母堂之を聞き非常に立腹せられ本多正純を惡むこゝ一方ならず、これを以て正純を罪惡人みなさん謀計を廻らせり、本多侯は今度の城廓大修繕は思ふ所存ありて

の仕業なりて種々の風説をなせり、正純の城廓の構造は怪しげなる所多く、地震の時戸の開きよ  
くせんが爲に遺戸を設けたる等は人をして怪しと思はしめたり。斯る巧妙なる作業は未だ知る者な  
かりしこそ、浴室の板敷を踏まば落ちる様に仕組み、其下には悉く刀剣を立て並べたりなど、風説  
はより／＼にして甲の説乙の説異り、只想像的に傳導せられたり、又今度根來同心が一同に誅せ  
られ、一つの穴に百人も埋めたるが如きも、此機妙、奇巧の工事に従事せし工人等あらば、此秘事  
を世間に泄されんことを恐れて全部誅滅したるものなるべし。流言區々たり。(田代黒龍著、宇都宮  
市史ヨリ輯録)

### (二) その真相

宇都宮釣天井と稱し、稗史、小説に、講談に唱導せられ、其の傳説は都鄙遠近に知られ、芝居に  
活動に演ぜらるゝに至る。其の釣天井なるものゝ宇都宮城主本多正純の除封始末を組み立てたるも  
のなり。

頃は寛永十三年の春、徳川家光日光廟に参拜するに當り宇都宮城を以て御旅館にあてらる。斯  
く宇都宮城に宿泊するに決したれば、正純は駿河大納言徳川忠長の傳へたり常に忠長を立て、  
將軍さなさんご欲せしかば、將軍の宿泊するや機逸すべからず居城に釣天井を構へて家光を殺さ

んご企てしが其のこゝ洩れて出羽に放たれたり云ふこゝなり。忠長を將軍に立てんご企てたるが  
如き謀反は正史にも見ざれば一の傳説に過ぎざるべし。

元和八年四月七日のこゝなりしが、將軍秀忠公は日光山にて七週忌の御法會行はるゝにより參詣  
あるべき由仰せらる。四月十四日本多正純の居城宇都宮に宿らせ給へり。十七日御法會終らせ十八  
日には中禪寺へ御遊覽あつて十九日今市より出立せらるゝ際、江戸より御臺所御不豫の申告け來れ  
ば宇都宮に立寄らずして鹿沼を経て壬生に宿らせたり。時に井上正就なる者一人宇都宮城に入らせ  
られたり。時に御旅館の構造の模様を詳しく巡察せられたり云ふ。

世の傳ふる所によれば奥平美作守忠昌の祖母は神祖の御長女なり。奥平本多宇都宮轉替の時  
より、皆姫君本多正統は心よからず折からきて、今度本多が御旅館、營造の様、奇巧を極め、  
世上種々の雜説行はれ、其上城中にて窃に〇〇を數多く設けて御旅館をば高く造り建て、其下をば  
自由自在に數人位は往來するこゝを得る様に構へ、其上營造は、深谷に急ぎ造作せり。又此造作に  
あづかりし根來同心等百餘人を一日のうちに悉く誅したるこゝは前節に述べたるが如し。又此頃京  
より數多の銃を苞首にして下したり。これ等の事は尤も不審とする所なり。御用意なくてはいかな  
る椿事を演出せぬも限らずして注意怠らず、伊賀守利重、此事注意せしが近臣之れを聞き、いか

さまさる事なかるべしは思はれず、既にならせ給ひし時には、宇都宮城に泊らせ給ひしが、御旅館の設け心得ぬこも多し。先づ寢殿の戸に樞をつけ置きしが、庭に出させ給はんこせし時、其樞落ちて戸を明くるこも能はず、又火事の用意にて御膳終るまでの間、城中殿に火を消さしめ、御先きにかまりし旅の行李をも解かしめず、病者あれば薬用にせんて湯を請へども與へず、家司を始め、家士等は皆野陣を張りて、馬の鞍をも取り離さず用意せり。これ等の事こも尤も不審なりなど。いよ／＼御止宿然るべからずこの事に決し、この夜直に壬生までおはしたりいへり云々。又一説に正純が造營したる寢殿の遺戸毎に、又戸一つづつを設けたり。これは若し地震して地かたむき、戸のひらかざらん時には遺戸より出させ給ふべきたるなり。斯る構造は世に未だあらざるに軍兵のみだれ入らん爲に設けたり人々怪しめり。又浴室の板敷落ちん様にたくらみ其下には悉く劍をならべ立てたりなどいふ事は跡方もなきこもなりいへり。されど本多正純が不審を蒙りしは故ある事なるべし云々。(徳川實記)

宇都宮志曰く。元和八年壬戌四月、秀忠公(家光)日光御社参につき先達て御目付衆所々を檢見せし所、御風呂の裏板怪しき所あり、御入城なく密に夜通し御社参あつて御馬にて江戸へ御歸城し下乗せらるや御馬斃れ次いで御納も倒れたりこ。其後十月山形へ御仕置者遣はすべきを陸奥守に御

相談して驛場毎に二百騎、三百騎隠し置き、御城は奥平美濃守殿相越され、山崎左近を以て今小路御門まで遣はされ、御城を渡るべき旨申入れたり。御城には上野介、子息出羽守、家老岡野九郎左衛門(若年内田)佛左近(若年池田)始め一同は籠城の評議ありけるが、其時蓮池御門の向ふに角櫓にて三階の櫓あり、佛左近は此櫓より見渡せば、北は竹林原より奥州勢大軍にて野陣をこり、東は水戸左竹、西南は上州勢、壬生鹿沼より詰めかけたれば、小勢にて籠城は叶ひ間敷く由、左近櫓より出羽殿並九郎左衛門に申しけり。今小路御門にては、山崎左近へ御城請取渡しなさせしこも、云々。著者謂らく是れ妄説の如し。

又曰く徳川家康最初に結城家康を嗣君に定めしや。又秀忠を立てべきや老中に相談せしに、秀康は一度豊臣の養子となり、其後結城家を相續すべきものなれば詮議に及ばず、秀忠を嗣君とするこも當然なり。佐渡守申ければ、他の老中等も異議なく同意せり。然るに本多正純一人承知せず、佐渡守の申す議は存せぬこもにして、如何にしても秀康公を御長子の事にて只今までは太閤に御遠慮にて懇々御疎くしく致せしも、御父子の情に替るこもなし。長子に御生れながら庶子にならせらるゝこも痛ましきこもなれど、秀康公を立つるこも順道なり申せば、佐渡守、怒つて叱りければ上野介其座を立ち退きければ其後遂に佐渡守並老中の意の如く秀忠公を嗣君に定め秀康をば越前に

封ぜり。秀忠公此事を遺恨に思へり。其後坂崎出羽守を討つべき詮議ありける時、上野介一人又合點せず、此詮議を聞き居たる一座の衆に申すに、出羽守を討てば慥に其跡を立てなざるや否や、問ふ。老中等曰ふ、それはならぬ事なり。扱ては謀事にて例へ實にあつても、而も主を討つて出せし申す。御下知が天下御仕置にあるべきことにてあるまじ、出羽守を御成敗なさるべくこの儀も上へ立合申す故にてはなきか、上へ立合せの爲め御成敗を仰せつけるに其家老に討つて出せし云ふは、天下の者合點せざるべし。其上御僞り事にてあれば彌々御仕置に似合はぬことなり。何事もなく私に仰せつけ下さらば出羽を踏み潰すことなどは朝飯前の事なりと申せり。秀忠遂に多分に御付あつて出羽守家老へ右の趣き内意に仰せ出さる。其紙面に老中等何れも判形せしも上野介一人判形せず、これに依つて上意に背くものにして君臣の間柄不和になれり。其上藤堂高虎の讒言もあり、それ等のことを捏造し、改作し、或は根來同心等の事柄も附加混作し、以て釣天井と稱する誇大なる事蹟を傳へたること成るべし。(田代黑龍著・宇都宮市史ヨリ輯録)

二二、二丸の大櫓

城趾本丸跡は尋ねることは出来るが、二丸跡は發展して知るこゝが出来なくなつた。現在市役所東構内に稀世の大櫓がありて

目通	五十二尺餘
根基廻り	七十六尺餘
高さ	百四十四尺餘
樹齡	一千年餘

標示してゐる。市内名木の一である。

二三、三丸の銀杏

二の丸が大櫓によつて示されてゐるやうに、三の丸趾にも大銀杏がある。

目通	十九尺八寸餘
根基廻り	三十三尺餘
高さ	八十四尺餘
樹齡	三百年餘

この巨木もまた市内名木の一である。

一四、白が峯

二荒山神社の鎮座してゐる所で、現在明神山と呼ばれてゐる。白は形状を云つたものか「うつ」

の轉訛したものが明かでない。

市内の中心に起伏し全影を一瞬に收め得られ、二荒山神社と共になつかしまれる場所である。遠く筑波、富士、男體、那須の諸山は田園を隔て、望まれ、春は花に社殿は彩られ、秋は中空高く秀月を望まれ、其の趣きまた勝なるものがある。

### 一五、花尾崎

白ヶ峰、茶臼山と連つて、そのむかし湖中に突出してゐたので花尾の崎と云ふ名が生れたものであらう。創めて二荒山神社をお祀した地である。その後東勝寺の境内となり、堂塔、伽藍の類立されて御寺ヶ峰と呼ばれた。

明治になり勤王殉難の志士を祀る招魂社を建立してより、現在は招魂山と呼ばれてゐる。

### 一六、鏡ヶ池

馬場、鐵炮、曲師の三町に圍繞せらるゝ小さな池がある。むかしの大湖の名残である。此の湖水を廻りて部落が繁榮し、池邊の郷と呼ばれた程であるから、其の廣さも推知される。現在に於ても水の乾いたことがない。

むかし古鏡が現れ、之を二荒山神社へ奉納して以來鏡ヶ池と呼ばれたと言はれてゐる。

### 一七、求食沼

むかし湖水があつたこと云ふことはまた求食沼と云ふ傳へをもつてゐる。現在に於ては細流の求食川がその名稱を残し、また百間濠と地藏濠、人家稠密してゐる旭町（辻町）と變つたが、その蓮池なども名残である。

### 一八、鴛鴦塚

求食川にそふた大町の一商家の裏にある。六地藏が刻まれた六角の石塔が建つてゐる。別に無住法師の「沙石集」に見えた獵師の物語りを刻んだ碑があつて、其の由來を明かにしてゐる。

### ○その傳説

今でこそ求食川は忘れられた小川であるが、その昔は河畔の柳枝の影を寫し、水禽たちの巢であつた。

鎌倉時代のむかし一人の獵師が住んでゐた。或日、どうした譯か不獵にて、しよんぼりこの河畔まで辿りついた。湖水を見るに一番の鴛鴦がのどかに遊泳してゐるのを發見した。ねらひ定めて放つた矢は過たず、其の一羽を射止めた。而しその「おしどり」には首がなかつた。

あくる日再び彼の獵師が昨日の河畔に立つてゐるこ、また一羽の「おしどり」を見つけ射止めて見るこ、きのふ射た「おしどり」の首は確かりその羽がひに抱かれてあつた。情を知らぬ荒稼ぎの獵師は云へ、暖かい情愛を見せ付けられて、不覺の涙を覺え、遂に髪を剃り、河畔に草庵を結び己れの罪ミ水禽の冥福を祈つたこ傳へられてゐる。これもまた鴛鴦塚の一つの傳説である。

### 一九、七木、七水、八河原

舊幕時代まで七木、七水、八河原と稱されて旅人の興趣をそゝつてゐたが、現在は名のみにて失實し、七水は僅に「龜井の水」が残り、八河原は地名として残つてゐる。

○七木 明神山の鹽竈櫻、日光堂の薄墨櫻、城内中門の化櫻、普賢堂の櫻、龜井の榎、松ヶ峰の槻、地藏堂の藤。

○七水 池上町の虹の井、元石町鏡の井、馬場町瀧の井、下河原龜の井、西原嘶の清水、明神山御供水、慈光寺の天女水。

○八河原 上河原、中河原、下河原、最上河原、北河原、七里河原、仙阿彌河原、安蘇河原。宇都宮の大部分は湖沼の埋立地であつたためか良水がなかつた。偶々清泉が湧出するこ、名所ミ

して呼ばれ、従つて河原も多かつたこ傳へられてゐる。

### 二〇、三藏山の古墳

栃木縣廳の裏山（二里山）の續三藏山の頂きにある。雷神社が祀られてゐる。

貴いお方の古墳である事は疑ひないが、明徴なく永眠者の何人であるかを知るこが出来ない。墳塚は遠く大和の地を向つてゐる等の事實に徴するこ、二荒山に神祀を奉じ給はつた、豊城入彦命の子孫中の墓墳であるこ傳へられてゐる。

### 二一、八幡山公園

八幡山公園は市の北部、縣廳の裏に續く丘陵を利用した自然の公園である。總坪數約六萬坪、その宏大さこ天然さは蓋し宇都宮の名所である。

近年市民の保健、衛生、慰安のための設備ミ人工の美を備へて、いよ／＼其の面目を新たにしている。

先づ入口の廣いだんだら坂を昇れば、右に八幡宮の落つきがあり、左にはなだらかな中腹を昇る九十九折に沿ふて四季折々の趣きを添ふる緑濃き多枝松のあるあたりは全面の阜月があり、正面に見える頂きの高い松は雪を頂く連山を背景とする美しさに既に心を奪はれる。



分水嶺をなす峰の頂きに着けば、四方に遠く視野が開け、那須、高原、筑波、日光の諸山が平原を通して指顧の内に收められ、其の名望佳絶である。

春は頂きの櫻に包まれ、西南に續く軍道の花霞を望められてより、皐月の花もあでやかに、新緑若草萌出づる頃、八幡山は和やかに自然のしたしみを與へてくれる。

夏は緑樹のかけも濃く、水禽等の水遊びの姿も涼しく、夏は涼みのそとろ歩きはこよなき親しみがある。

秋は紅葉に夜は明月のながめ、蟲の鳴く音と共に一入に住く、冬は雄大なる雪景色また例ふべくもない。

### 三、軍道の櫻

春は櫻から始まる。櫻々、久しきをまつ花の櫻は春のしたしむを與へて呉れる。その櫻の名所、宇都宮には何と云つても軍道である。市の西に走る里餘の並木は全國に冠たる櫻である。觀光客日に幾萬に數へられ、花は電燈さぼんぼりに彩られて花瓣の影を追ふてながむる風情は、蓋し宇都宮の名所である。初夏になればすがくしい新緑のトンネルは涼味を覺えて市民をいつまでも引つけてゐる。

## 三 郊外の名勝

- (1)、名勝地大谷―(2)、大谷觀世音―(3)遊樂園―(4)、お止山
- (5)、多氣不動尊

### 一、名勝地大谷

耐震耐火として名高い大谷石の産地である。宇都宮より西へ一里餘乗合自動車の便もある。

こゝかしこに點在する大谷石の建築地底からひびく石切の音は遊覽者にまつてめづらしいものであらう。

數十丈の斷崖にある天狗の投石、岩山を自然の屋根として壯麗なる觀世音、そして堂深く藏されてゐる佛像、弘法大師の姿を映してゐる三云ふ奈川、野州耶馬溪に稱せられてゐるのも決して無理でない。

坂東札所の觀世音は古色蒼然として天然記念物に指定されてゐる。

### 二、大谷觀世音

天開山に稱し、天臺宗に屬して坂東十九番の札所としてむかしから有名である。御本尊は弘法大

師作と傳へられる。千手觀音菩薩である。人皇五十二代嵯峨天皇の御代に弘法大師様が開いたと傳へられてゐる。

その當時この岩穴に大蜂の巢があり諸民を悩ましてゐたのを傳へ聞き、衆民の難を救はんとして來山し、一夜の内に十七尊を岩面に彫り、三七日の參籠の上秘法をもつてその大蜂群を退治し、一寺を建立したものと傳はつてゐる。

日本三石佛の一である。この附近一帯奇岩奇石横はり、景勝優れてゐる。

### 三、遊樂園

お止山に向ひ合つて遊樂園がある。晝尙暗い山道を辿り九十九折を昇りつめれば富士見臺、旭臺、衆ヶ鼻等の奇岩の頂上に達する。

岩壁の松の緑も佳く、筑波、白根、男體、那須の諸山を一望のうちに納め、眼下絶壁の下には春は若菜に、秋はもみちに仙境の飽なき眺めを添ひて觀光者の目をよるこぼせてゐる。

春は野汐の遊樂園に、秋はもみちのお止山に行樂者の足が絶えない。大谷の幽翠はまづ遊樂園である。

### 四、お止山

大谷觀世音の境内の西側にお止山がある。春は奇岩の間にくゞ若葉が薫り、野汐つゞじの花美しく咲き亂れ、秋は大谷全村の紅葉をながめる山の頂きの視野は雄大である。

明治年中長くも大正天皇、皇太子にましまされし折、二度の行啓を仰ぎ御手植の松を恭うした所である。

遙か日光の諸山を望めば、四季折々の風光佳絶にして小妙義の稱がある。

### 五、多氣不動尊

大谷の名勝遊樂園より更に西北に風光を眺めつゞ道を走れば、老杉、古松鬱蒼とした山に着く。多氣山である。

そのむかし宇都宮家の祖宗圓が城を築いたゞ城山と呼ばれたと傳へられてゐるが、逆賊阿部頼時が叛亂したので宗圓は勅命を奉じ、大江山の鬼退治に有名な圓覺上人彫刻の不動明王を奉じて、こゝに一千日の朝敵調伏の祈禱を行ひ爲めに頼時は降伏し、宗圓其の功により下野國守護職に任せられたと云ふ不動明王が祀られてあると傳へられてゐる。

此處もまた奇岩、怪石に富み眺望開け、四季の望めに優れてゐる。

#### 四 この地の名物土産品

(1)、宇都宮名物—(2)、おみやげのさまざま—(3)、俚諺

##### 一、宇都宮名物

宇都宮名物はまだ普遍に知られてゐないが本市相當なものがある。先づ口にするものでは宮の餅友しらが、長生、岩蛤などの菓子類は上品である。

壽司になくてならないものに干瓢がある。漬けて都漬、からし漬又は干瓢羊羹などはまさに名物である。また外皮の加工品に瓢細工がある。これは本市獨特の名物である。

炭取(瓢炭入)、瓢盆、煙草盆などは面白く、風致雅味に富む花器類は有名である。

庭下駄または夏宵の散歩下駄として古典的な宮下駄がある。

浴衣地には宮染中形がある。色調不變な點は京都のそれに匹敵し、扇子、團扇、番傘、日傘も亦名物である。

殊に臯月は全国的に有名な園藝花卉である。

##### 二、おみやげのさまざま

- (1)、瓢細工—(2)、宮餅—(3)、友しらが—(4)、長生羊羹—
- (5)、岩蛤—(6)、鶴天井—(7)、臯月

##### 瓢細工

あのグロテスクな道化お面ミ、ゴロ／＼店頭に飾られてある瓢炭入は、宇都宮に來た誰れしものが氣の付くめづらしいものであらう。

あれは瓢箪ではない、福蒲即ち「かんびよう」の外皮のなれの果である。形状の面白味に雅致は瓢細工をして益々發展せしめてゐる。

生花、投入、盛花等の花器類に至つては、また格別の風致雅味に富んだ天下獨歩のものがある。近年其れらのいち／＼しい發展を來したのも、複雑な社會生活を潤す何物かの存在があるからであらう。

瓢盆、茶器類、煙草盆、瓢火鉢、玩具等それ／＼天然の形状を保ちつゝ塗技術の發達に相俟つて「宮ついで塗」にして目ざましい躍進は、蓋し宮を宮たらしめる郷土色濃厚なものがあるからである。土産品として我が宇都宮になくてならないものゝ一つである。

## 宮の餅

宮のみやけは宮の餅、土産品として數へられるものに宮の餅はあまりにも有名である。郷土色たつぷりな包装は先づ購買心をそり、そしてあの甘やかな香り、味は特別にお嬢さん坊ちゃん奥様向の良なおみやけである。

## 友しらが

四海波静かに……人生のよろこびに嘗ては味はつた或は味ふ場所になくてならぬものに「友しらが」がある。其のなつかしい友しらがである。本市特産として數へられる干瓢を原料として造られためづらしい土産品で、香氣、味、形状に面白味がある。

## 長生羊羹

黒砂糖のあめ玉、あの香、味を考へるに子供の頃を思ひ出す、ここほど左様に長生の味はまたなつかしい。

何んになれば長生は時代におくれた？ 黒砂糖の羊かんであるから、云つても精練された味は都會人の口にびつたり来るものがある。およそ海に縁のない宇都宮にこれまためづらしくも和船

型の包装は海にあこがれる我が市の郷土土産品であらう。

## 岩 蛤

そのむかし湖水であつた云ふ宇都宮の傳説は、今尙發見される三藏山、八幡山から見出される化石に因んだ岩蛤、云ふおみやけがある。

しかも食べる菓子でなくて飲む菓子であるから面白い。可愛らしい小さな蛤へ熱湯をさしてすぐ出来るくづ湯は、海山にあこがれを持つ郷土のみやけである。

## 鶴 天 井

將軍歴殺の釣天井の郷土傳説は鶴天井（釣天井）云ふ土産品を持つてゐる。

城廓を舞ふ群鶴の形をした多愛もない打物ではあるが、食べる前にまづ遠いむかしを想はせられる。宇都宮に来る誰れしもが知つてゐるであらう釣天井を偲ぶのに相應しいみやけである。

## さ つ き

生きたおみやけとして數へられるものに盆栽がある。其の盆栽のきれいな花として誰れしもが恐らく知つてゐるであらう臈月こそ、また我が宇都宮市附近の特産である。

何んこも言はれない福よかな花瓣、色澤もこりぐに大輪あり小輪あり、其のさやしい皁月の姿は園藝家の誰しも達に愛でられるものゝ一つであらう。忘れろここの出来ない宮の郷土のほこりである。

宮盆踊唄 (宇都宮市社会課選長倉政夫改編)

一、宮の名所は

二荒さんよ おがむその手で

ぼんをどり

二、昔なごりの

つり天井も 夜はをどりの

わにふける

三、馬場よいこ

なく子も笑ふ わたしやばんぶら

夜がすき

四、広い本丸

をどりにふけりや 月もうかれて

顔を出す

五、武士ぢや君平

櫻ぢや軍道 お月さまさい

花に出る

六、かねがなるく

しめじが原に 昔ながらの

かねがなる

七、夏は涼しい

千波河原 いきな宮染

水に浮く

八、石で名高い

大谷の名所 十ニ九番の

札所

九、宮で名高い

鏡ヶ池は 宮の名所の

筆がしら

十、ハズム太鼓に

月さいさいて 夜の本丸

人の波

十一、おらが國さで

自慢ぢやないが 天狗投石

多氣不動

十二、音頭取るのは

宮染浴衣 柄も揃ふた

踊りツ子

宮小唄

作歌 巖谷小波先生 宇都宮中央見番  
作曲 町田嘉章先生 宇都宮高砂組合  
振付 花柳徳之輔師

一、こゝは名に負ふ玉くしけ

その二荒のふたあらの

神の守りの宮の町

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

二、花は櫻木人は武士

その軍道に軍道に

咲くや櫻の花の雲

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

三、名にし大谷の觀世音

その石山に石山に

堅い誓ひをかけ守り

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

四、武士の鑑は蒲生さん

さて横綱は横綱は

それよ明石の志賀之助

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

五、四季の眺めは八幡の

その山かつら山かつら

富士に筑波を兩の手に

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

六、雲のさわりも無い空に

あれ照る月の照る月の

すむや鏡の池の水

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

七、聞くもあはれや求食川

あのをし鳥のをしどりの

塚に涙の語り草

誰も来て見やよつて見や

八、木こそ若けれ花紅葉

そしてお手てを宇都の宮

あの公園に公園に

やがて織出す綾錦

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

九、舟で涼みを仙波の

その川波に川波に

夏を忘れる柳かけ

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

十、いつか算へてむかしから

世に聞えたる聞えたる

七木七水八つ河原

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

十一、宮の町でも江野町は

てもおもしろやおもしろや

ほんによいよ中央がよい

誰も来て見やよつて見や

そしてお手てを宇都の宮

名物 宮 音 頭

作者 竹柴金作  
作曲 清元豊後太夫

宇都宮いろは見番

『遠近の望む詠は一荒の御山つづき深雪積雲を色みる紫の景色を見やる下野の都に銘を宇都宮  
七木七水八つ河原名所を集る筆づさみ』

『まづ立初める春霞野邊も長閑にほらく花美名姿をうつろいて我に見ゆるか鏡が池の水もぬる  
 みて釜川の渡りに舟の竿させば下る瀬早き瀧の水流れく北河原集ふてこゝに睦み合勇ましき  
 御魂を祀る下の宮八幡山は皇夫の赤き心をうす墨の櫻に染しさをしを守る日本の神の庭かけし  
 誓もはづかしいうぶないろはの兼事もかたいちぎりも石の坂昇りつめたる戀のくせ顔に赤根のさ  
 しもぐさ根なし草は仇口なそしてさかさひざりにひざりこどわけも何やら官音頭  
 『お國名物大谷の石よエ眞岡さらしの賑ふ織地エ宮の干瓢こり合もエ地物より品麻では鹿沼エ足尾  
 に銅山紙からす山  
 『足利織物かづくごさるエ佐野の染綿綿糸織地エ益子ひゞやき男女子が繭の糸こりは織唄をエ集  
 ふて唄ふはやりうた  
 『岩の蛤りやテモめづらしいあじやりあさりの川のそこヨイくくヨイヤサ  
 『恨やしいほどよい中河原これも結ぶの上河原ヨイくくヨイヤサ  
 『さまに大谷のその願がけに七里河原もかちはだしヨイくくヨイヤサ  
 『祝ふまんどう龜井の榎君は千歳の鶴の井戸ヨイくくヨイヤナおもしろや  
 『咲揃ふ野山美し花の中老も若いも生めて浮れ拍子の千鳥足醉ふた氣けんで時代なけんも打やは

ゆて櫻かり  
 『當地に名高き風景は 縣の司町くの軒場賑ふ繁榮はいく千代かけて目出度けれいく千代かけて  
 目出度けれ

全國代 表民謡 下野小唄

下野新聞社特編  
 佐伯孝夫作詩  
 松本信博作曲

わたしや下野 野に咲く花よ  
 なびく黒髪山 胸の火の  
 燃えて那須野の 月あかり  
 温泉がこりもつ 戀の唄。  
 赤い手柄に そこ物言はせ  
 眞岡木綿の 稼ぎもの  
 主三二人で 干瓢剥き  
 秋にや鹽原 紅葉狩り。

---

うれし逢瀬の 日光巡り  
 赤いお宮に 青嵐  
 瀧は華嚴か 霧降りか  
 末は大谷川の 玉しぶき。  
 戀のスケート あの中禪寺  
 派手な襟巻の 娘が招く  
 胸の水も 春風に  
 解けて宇都宮 花便り。

全國代  
表民謡

よほゝい節

下野新聞社募集一等當選  
菅原理一作詩

長田幹彦補作  
松平信博作曲

鬼怒を下れば 男體アまねく

(ヨホ、イ〜)

飛んで行きたや 幸の湖へ

(アリヤコイコイ〜野州にネ)

ヨホホーイ

日光見ぬ内ア 結構ミ云ふな

(ヨホ、イ〜)

杉の並木は なほ見事

(アリヤコイコイ〜野州にネ)

ヨホホーイ

鬼怒の温泉は 肌身をこかす

(ヨホ、イ〜)

谷ちや河鹿の 戀の唄

(アリヤコイコイ〜野州にネ)

ヨホホーイ

紅葉鹽原 あの高原に

(ヨホ、イ〜)

熊が住むも 主なら

(アリヤコイコイ〜野州にネ)

ヨホホーイ

私や那須嶽 麓の乙女

(ヨホ、イ〜)

胸の煙りは 何時はれる

(アリヤコイコイ〜野州にネ)

ヨホホーイ

五 宇都宮名代の行事

(1)、二荒山神社祭典と宇都宮―(2)、盆踊り―(3)、商工祭

一、二荒山神社祭典と宇都宮

お祭には大、中、小の區別がある。

大祭には知事が幣帛供進使として参向せられて神職はみな参籠をして齋戒をする。中祭にも同じやうに齋戒をし、小祭には當日だけ齋戒することに於てゐる。

攝社、末社の祭は小祭で、大祓や遙拜はみな儀式である。

二荒山のお祭はみな本市民のお祭であつて、一年を通じて約五十の祭りがあつて、其の主なるものを記してみよう。

○暮市、初市、花市

いづれも市神祭である。二荒山末社の神社のお祭ではあるが、むかしから本市の行事として市街は非常な賑はいを呈してゐる。

「暮市」は十二月二十八日から三十一日まで続き、神輿は表の坂下に御出ましになる。境内より



馬場町附近一帯露店が出来、注連飾、神だな、新年のおかざりもの、家具類が賣出されて賑ひ、三十一日夜の十二時から新年の延喜物が盛んに賣出される。来るべき新年と共になつかしい行事である。

「初市」正月の十一日神輿が上河原町まで御出ましになる。そこを中心にして、露店がたくさん出張り、福運だるま、福神像、延喜物、家具類が賣出される。附近の村落からの人出多く、正月のどけさと共に賑やかな行事である。

「花市」舊正月十一日、御本社の表坂下におでましになる。参道の兩側より附近一帯に露店ができ、造花類を初めとして初市同様に種々なものが賣出される市である。

### ○おたりや祭

春三冬、二度おこなはれるお祭である。

むかし初の子午の日に行はれたものであつたが、明治の御代になり新舊の十五日に定められた。兩祭とも夜の八時半から御本殿に祭典があり、續いて神輿が御出ましになり、御旅舎(東照宮)に御少煎中に田樂舞を奏する。それがすむ市中の一部を渡御になり、廣馬場をへておかへりになるのである。

### ○春 渡 祭 (一月十五日)

この祭は火防の神恩あらたかであるとして遠く他府縣、殊に東北地方からの参拜者が多くある。深夜まで市中は非常な賑へを呈し、各商店は聯合賣出し、其他等を以て顧客の誘致に努めてゐる。

### ○冬 渡 祭 (十二月十五日)

春の「おたりや」と同じである。暮近い街は春のそれと趣きを異にしたにぎはひがある。近縣よりの人出多く、暮の賣出しはこの頃から初められる。

### ○花 會 祭

櫻花咲く春の四月十一日に催される。秋の菊水祭と對祭である。

やまご心の敷島の初花をまつ神前にさし上げてから、一般に觀賞しよう云ふ意のお祭である。二十四把の櫻花が神官によつて奉ぜられてのち、延年舞(えんねんまい)云ふ獨特の舞樂が奉せられる。

のどやかな春、櫻の花も咲き初むる頃、古典的の舞臺から流れる笛、太鼓のひびきはうれいものである。この頃から街は花見の客ににぎやしい。

## ○官祭招魂祭

四月三十日國家から幣帛を供進せられる大祭である。午前八時本殿にて官祭が行はれ、それよりあまたの軍人、學生、有志町民に送られて舊城趾御本丸に神靈が奉遷される。しよう、しちりき、笛、太鼓の調も神代ながらの趣きをそへて、多くの神官たちに護られて行くのである。そこで更めて知事、師團が祭主となり、大祭典が行はれる。

廣い本丸も餘興（角力、擊劍、柔道、大弓、銃劍等）があり、縣下からの参拜者も多数、街は非常なにぎはひを來し、午後四時また人々に送られておかへりになる。

## ○須賀祭

末社須賀神社のおまつりである。七月十五日より二十二日まで催されて、天王祭とも言はれてゐる。十五日より神輿のおでましがあり市内を巡幸して最終日におかへりになられる。

市街は注連、提灯がこもされ、殊に夜がにぎやかである。遠近の觀光者が多く、大賣出し等を各商店は競つて行ひ、にぎやかなお祭りである。涼みがてらのお祭の夜は、なつかしい宇都宮の姿である。

## ○秋山祭

むかしは大湯祭といはれてゐた。十月二十一日に行はれてゐる。

朱雀天皇の天慶二年（紀元一五九九年）平將門が叛亂のとき天朝よりは鎮定の御祈願があつた。翌三年正月、將軍依藤太藤原秀郷公も祈請せられた。その顯もあらたかに三月將門は滅亡したので秀郷公は甲冑、弓箭、大刀を奉納し、天朝よりは秋山（大湯）御田主（小湯）の二祭をはじめられたと傳へられてゐる。

現今も御神鏡を奉納する古式が傳へられてゐる。そして寶祚の無窮、國威の發揚、民草の幸を祈願するため知事は供進使となり天皇陛下よりの御幣帛、御神饌を奉納せられる。

## ○流鏑馬

菊水祭前日の神事として残されてゐるものに流鏑馬がある。十月二十七日の午後三時頃から舊馬場より末社の荒神社前にかけて鎌倉時代の装束で、ものゝ美しい騎士が古典な馬具を飾つた馬上から流鏑馬を行ふものである。

古式的が先づ三ヶ所に立てられる。武者振るひする四騎は連續的に疾驅して、妙手あざやかに之を射るのである。そのめづらしさ美しさに觀覽者が群集し、馬場一帯から市街にかけてにぎやかである。

古い習慣をそのままに残した流鏝馬は、菊水祭と共になつかしい行事として市民に観光者をよろこばせてゐる。

### ○菊 水 祭

この祭は秋山祭の附祭であつた。傳へられてゐる。國花、黄菊、白菊の咲くうららかな中秋の十月二十八日、二十九日の兩日に流鏝馬と共に催される。

むかしから關東の大祭である。稱されてゐる通り、一年中で一番にぎやかな祭である。山車、屋臺等各町から出されて囃子もにぎやかに、各町を練りあるく様は他所の祭りで見られない。宇都宮獨特のものである。

近縣近在からの観光者も近く市内に非常な雑踏を極める。殊に二荒山神社に陳列される菊花のさまさまは、秋のお祭にふさはしいものである。お祭は何と云つても菊水祭である。

二十八日は早朝から祭典について流鏝馬があり、續いて全市の半分を神輿が渡御になる。その行列がまた昔ながらのしきたりを傳へて見物である。二十九日も二十八日と同じく残りの半分を御渡りになり、遷御祭に流鏝馬があり三日間の菊水祭が終るのである。

### 二、盆 踊 り

どこの國にもある様に宇都宮にもまた盆になる踊りがある。廣い本丸城趾にはシャンデリーに輝く大櫓が建てられる。笛、太鼓のひびきものどやかに人の心を浮かす調子で鳴りひびく。若衆連は本丸へへ集まつてくる。

郷土自慢の俚謡に夏の薄月も浮かれて顔を出す頃になる。二重、三重に手拍子足拍子面白く、單純な踊りではあるが何となく人の心をひきつけて、人々を一ぱいに集まらせる。

デデンガドンドンドン、平和なリズムに合せて踊るたのしみはまた、夏のこよなきたのしみである。ひびり踊り手ばかりのそれではなく宇都宮市民のそとる歩きの足の向け所として。

近年郷土教育を論じた歌詞を市役所が募集してレコードに吹き込み普及した。め益々盛んになつてきた。宇都宮に来るもの、忘れてはならない一つの見ものである。

### 三、商 工 祭

毎年十一月二十四日、二十五日の二日間市民の祭りとして商工祭が催される。

菊水祭も終る。またいつもの宇都宮になる。そうして日一日と暮の用意に忙しくなる頃、本市には最後の催しとして市役所會議所主催になる商工祭である。

本市の物産を廣く他地方へ紹介するため、製品の改善を計るため、従業員の慰安のため、そうし

て本市商工業の發展を祈願する商工祭は菊水祭にも優るにぎやかな催してある。  
市内各所に舞臺が造られる。種々な演藝餘興が一般通行人を喜ばせて、本市が益々生産都市へ轉向して居ることを思はせられる。去年は廣告の大行進があつた。主催者の寶船を先頭に各種各様の意匠をこらした大掛りな廣告車は山車、屋臺にもおこらない見物であつた。年々續けられるこの市民のお祭はもう北關東の呼物の一つである。宇都宮を知る者の新しいみもの、一つとして記憶されたいものである。

## 六 雜 錄

明治維新以來宇都宮も年々世界的文化の影響を受けて、進化せる制器を生活の各方面に應用してゐる。

○郵便は明治五年七月一日始めて郵便局の設けありて通信事務を執つた。同七年二月一日電信の取扱ひをなした。

○電話は明治三十五年七月十六日通話事務を取扱ひ、同卅九年十二月廿七日交換事務を開始した。

○鐵道は明治十八年七月東北本線の開通を見、更に二十三年三月日光線の開通ありて交通上至便を

なした。更に大正七年より自動車の運轉ありてより爾來其の數を増し、本市を中心に八方に自動車網をなして居る。

○電燈は從來石油を點じ普通のランプを用ひて居たが、明治三十二年始めて市内に電燈を應用するに及び、ランプは自然に廢さるゝ状態になつて來た。

○馬車 馬車には客馬車と荷馬車とあり、客馬車は往々減じ昭和初年より殆ど廢止されるの止むなきに至つた。荷馬車も貨物自動車に壓せられて振はず。

○新聞 明治十四年六月五日下午野旭新聞第一號の發刊を見たが、第三十八號を刊行し其十月廢刊になつた。

○避雷針は明治二十年頃高橋鐵吉氏が學校、銀行等に備へ、又明治三十年縣廳内に室内電話を設けたる等は當市に於ける最初の試みである。

○パン 西洋式パン製造は明治二十年三月富貴堂本店福田富次郎氏が當市に於て製造したるを以て初めとしてゐる。

○牛肉 徳川時代には牛肉を食するが如きは殆どなく、幕府よりも制せられて居たが、明治の御代となり西洋風の流行につれて牛肉を食ふ者多くなり、時勢に従ひ明治十六年頃八百駒本店小野七

藏氏始めて牛肉を賣出したミ傳へられて居る。

○自動車は大正七年より埴田町柴田政治氏始めて市街及近在の交通機關として乗合又は貸切等を運轉せしが、大正十一年宇都宮自動車株式會社組織を變更し十二年八月廢業した。之より先五井淵七藏氏新石町を根據として市街自動車會社を組織し、市内は勿論芳賀郡の各方面及び日光方面まで運轉し本市の交通の便に供してゐる。

○ラヂオは大正十四年二月二十日中央局にて試験的放送の際、下野新聞社にて之を受信したが成績不良なる。更に三月二十日より本放送せしより完全に聴取するこゝを得た。是宇都宮市に於けるラヂオの始めである。

附  
録

商  
工  
人  
名  
錄

索引

イ：飲食物、五十集(乾物)、印刷(石版)、鑄物、生花、醫療器械、繪葉書……………一  
 ハ：履物、下駄(草履)、双物……………一  
 ニ：肉類(牛、豚、鶏)……………二  
 ト：陶器、漆器、時計、籐細工、塗料……………二  
 チ：茶、提灯(際物)、著香機……………三  
 リ：旅人宿料理、料理店、理髮店……………三  
 オ：織物、折箱(木箱)……………六  
 ワ：綿絲、和服裁縫(縫箱)……………六  
 カ：菓子(煎餅)、家具(指物)、金物、紙(文房具雜貨)、硝子玩具、干瓢、蒲鉾、眼鏡(印章)、形付、樂器、皮具(傘製造、瓦、甘藷、鍛冶)……………六

ヨ：洋服、洋物……………九  
 タ：足袋、建具、種子、代理業……………一〇  
 ソ：染物、葬具……………一〇  
 ツ：漬物……………二  
 ナ：納豆……………二  
 ラ：ラザオ……………二  
 ウ：請負、團扇、運送業(自動車)……………二  
 ノ：農具(機械)……………二  
 ク：靴……………三  
 ヤ：藥種賣藥……………三  
 ケ：化粧品(小間物)……………三  
 フ：佛具、文房具、袋物、古物……………三  
 コ：穀類薪炭、吳服太物、小間物(化粧品及ビ半襟、靴コンクリート製造業、コソニヤク、骨董)……………三

テ：鐵工業……………一六  
 ア：荒物(雜貨)、青物、青果(乾物)、油(煉油、石油、水油)……………一六  
 サ：酒類、醬油、材木、砂糖雜貨……………一六  
 キ：金錢貸付業、金庫製造業……………二〇  
 ヌ：牛乳、機械製造業……………二〇  
 ヲ：弓……………二  
 メ：メリヤス……………二  
 ミ：味噌……………三  
 シ：薪炭(煉炭)、醬油、質屋、自轉車、書籍、寫真(額縁)漆器、周旋業……………三  
 ヒ：肥料……………三  
 セ：鮮魚(乾物)、石炭、コーク(ス)、石材、製麵、精米及製粉、パン、洗濯業、製鉛、清涼飲料水……………三  
 ス：酢……………三

【イの部】

營業名	昭和年度	昭和三十九年度	電話	町名	氏名
飲食店	三、〇一九	三、〇九六		馬場	高山 泰吉
蕎麥料理店	二、五六六	二、五六六		全	森山 彌吉
飲食店	二、〇八二	二、〇八二		江野	植木 定助
飲食蕎麥店	三、三三六	三、三三六		一條	間瀬 芳松
全	三、三九〇	三、三九〇		相生	金子 平三郎
飲食支那蕎麥	三、四六六	三、四六六		中河原	渡邊 文太郎
飲食壽司	二、九二九	二、九二九		川向	堀井 延次郎
飲食店	二、四四四	二、四四四		川向	高山 要造
五十集乾物	三、八〇一	三、八〇一		全	齋藤 精一郎
全	三、九〇三	三、九〇三		戸祭	大門 金次郎
全	二、八八一	二、八八一		宿郷	山本 熊次郎
全	二、八八一	二、八八一		全	村上 文彌
全	二、八八一	二、八八一		今泉	林金 一郎
全	三、一〇六	三、一〇六		扇	鈴木 文郎
全	二、三三三	二、三三三		大工	宇梶 幸吉
全	三、四〇〇	三、四〇〇		大工	須田 市太郎
全	三、三〇〇	三、三〇〇		大工	箕輪 忠次郎
履物	三、〇九六	三、〇九六		大	藤本 國藏
全	二、四九九	二、四九九		上河原	關根 榮吉
全	二、六六六	二、六六六		全	石塚 太重
全	二、四六六	二、四六六		今泉	渡邊 茂一郎
全	三、二八八	三、二八八		大	荒川 八十吉
全	二、五八六	二、五八六		池上	永井 三三郎
全	二、〇九〇	二、〇九〇		二條	鈴木 龜男
全	二、七二六	二、七二六		池上	福田 庄太郎
全	三、〇八五	三、〇八五		大	増田 章一郎
全	三、一〇三	三、一〇三		全	渡邊 定吉
全	三、二六四	三、二六四		旭	龜山 縫次郎
全	三、三三三	三、三三三		小袋	萩原 誠吾
全	三、五〇四	三、五〇四		旭	龜田 柳吉
全	三、五〇四	三、五〇四		江野	谷村 龜吉
全	三、三六八	三、三六八		上河原	浦島 淺吉
全	三、三六八	三、三六八		馬場	岩瀬 巳之助
全	三、〇九六	三、〇九六		大	柏田 長七
全	三、〇九六	三、〇九六		大	高村 孝吉



















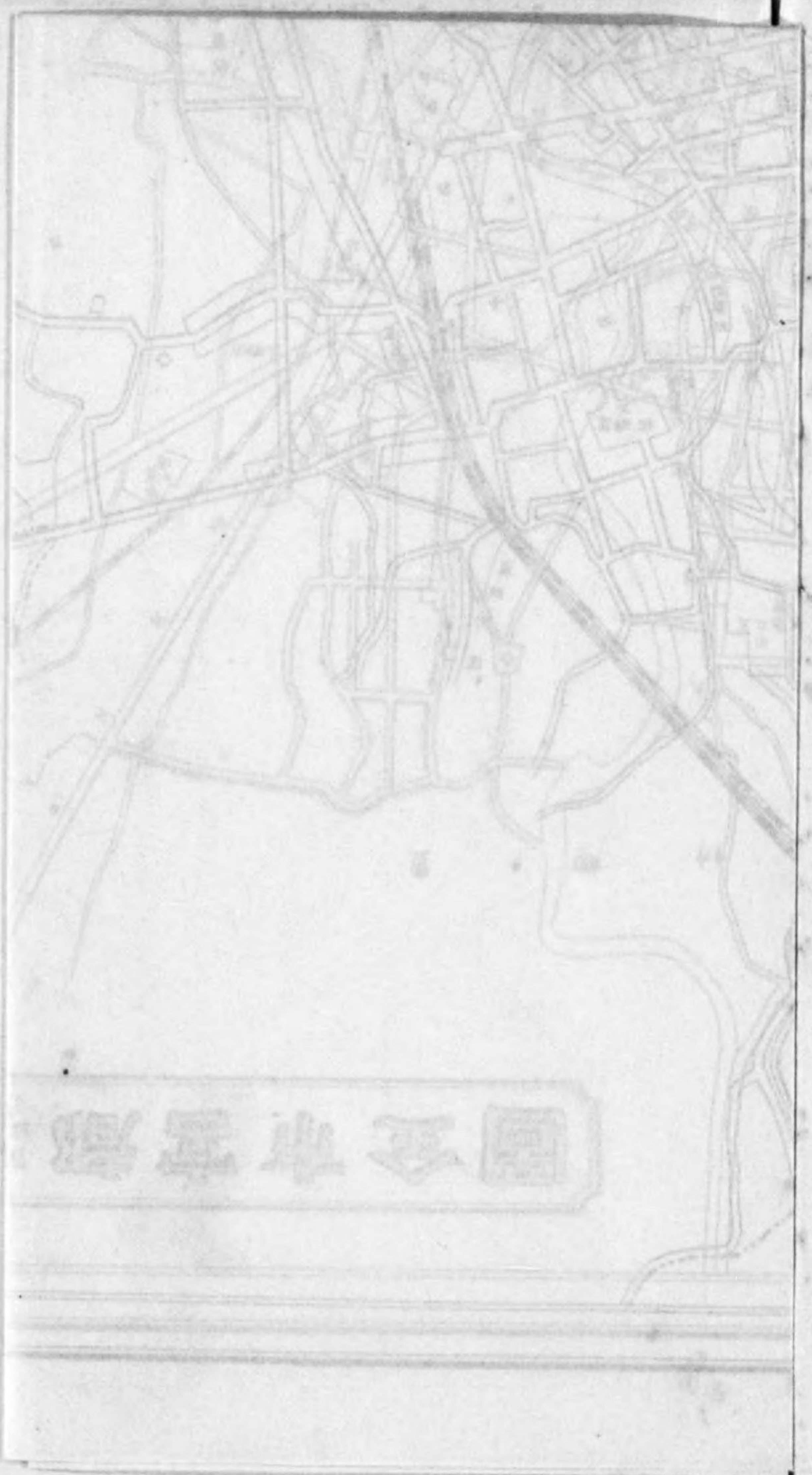












宇都宮市役所

昭和九年四月八日印刷  
昭和九年四月十日發行

【非賣品】

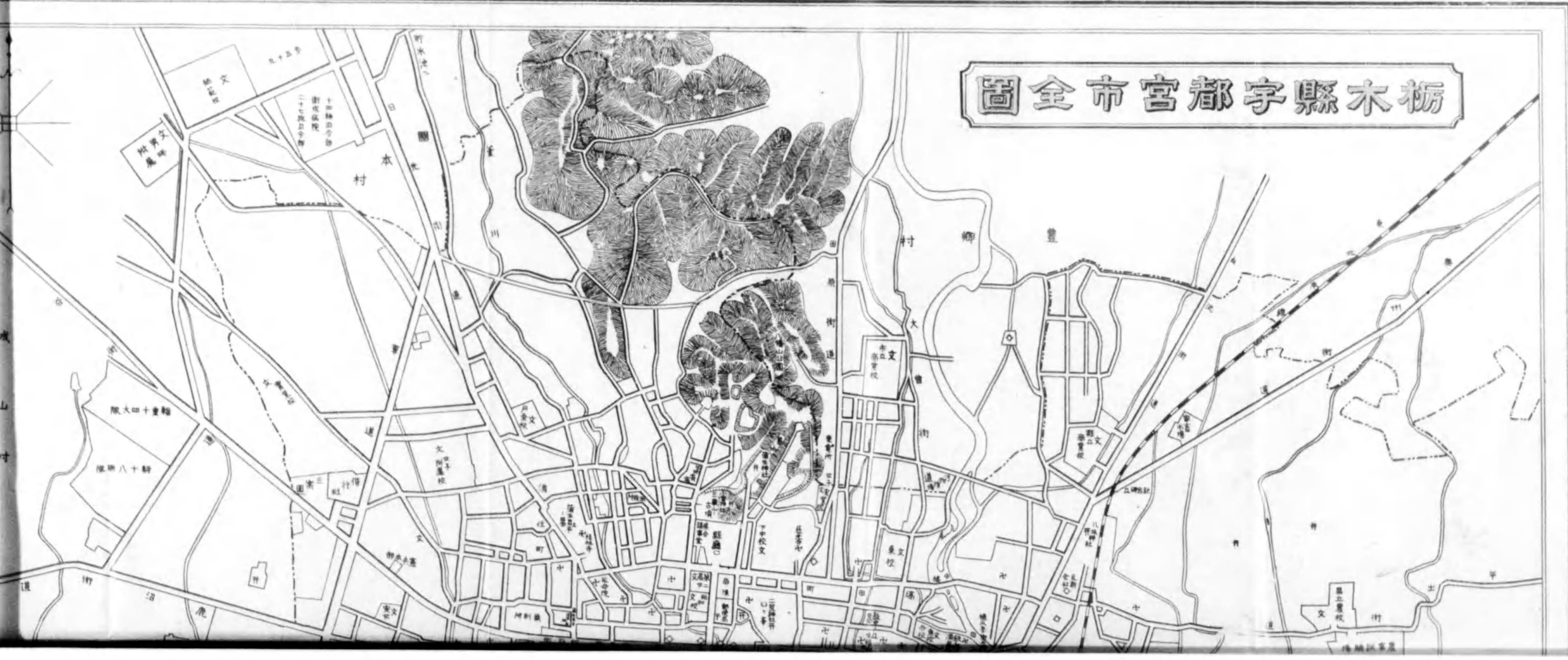
編纂兼 發行所 宇都宮市役所

宇都宮市旭町二ノ三、四三三

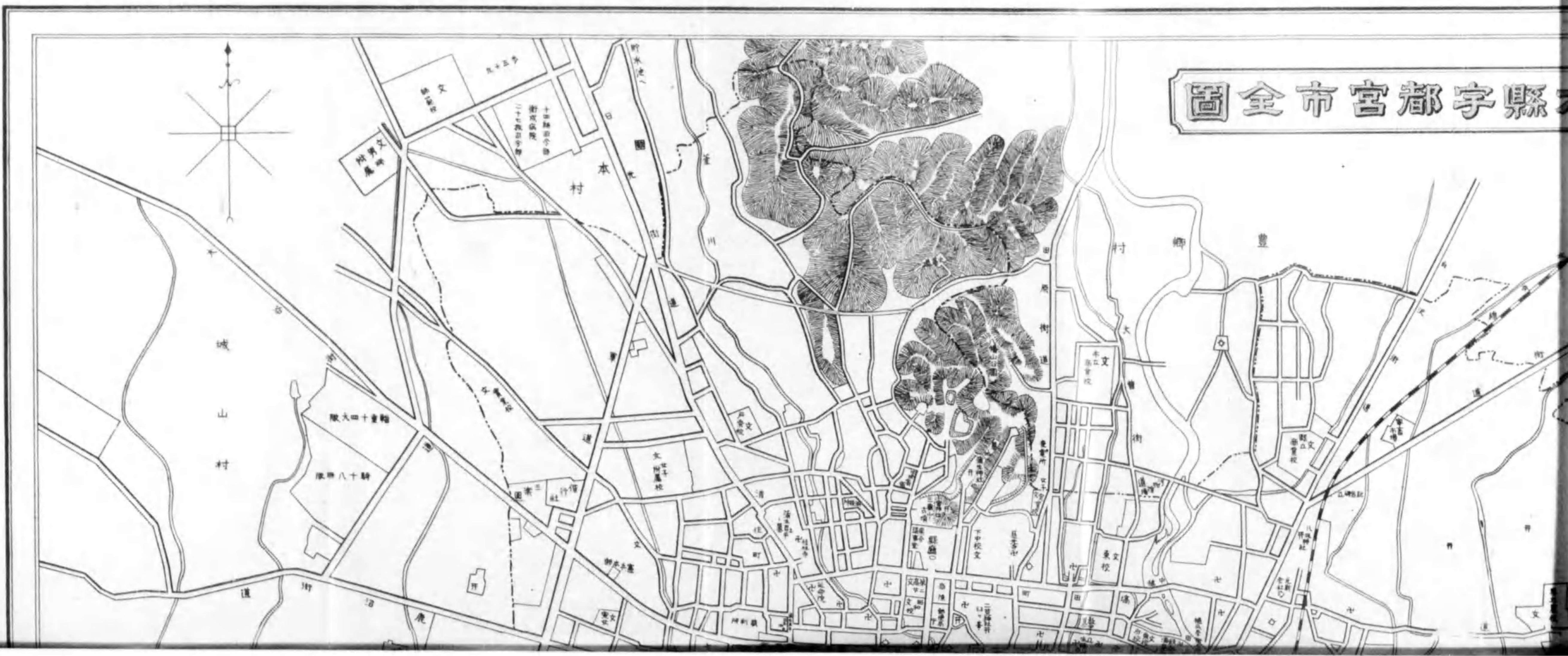
印刷人 秋山錦次郎

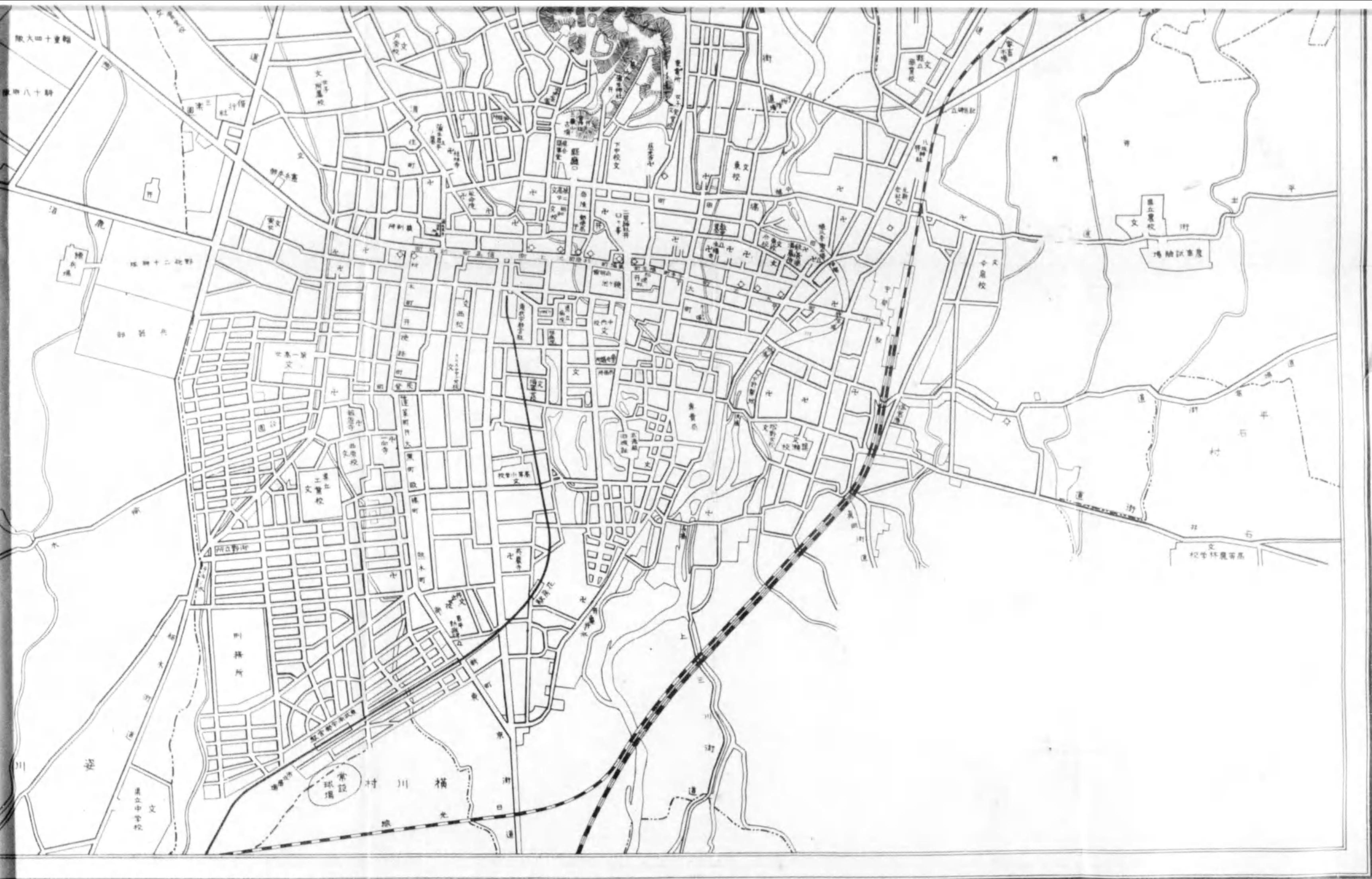
印刷所 宇都宮市旭町二ノ三、四三三  
株式會社 三共社印刷所

栃木縣宇都宮市全市圖

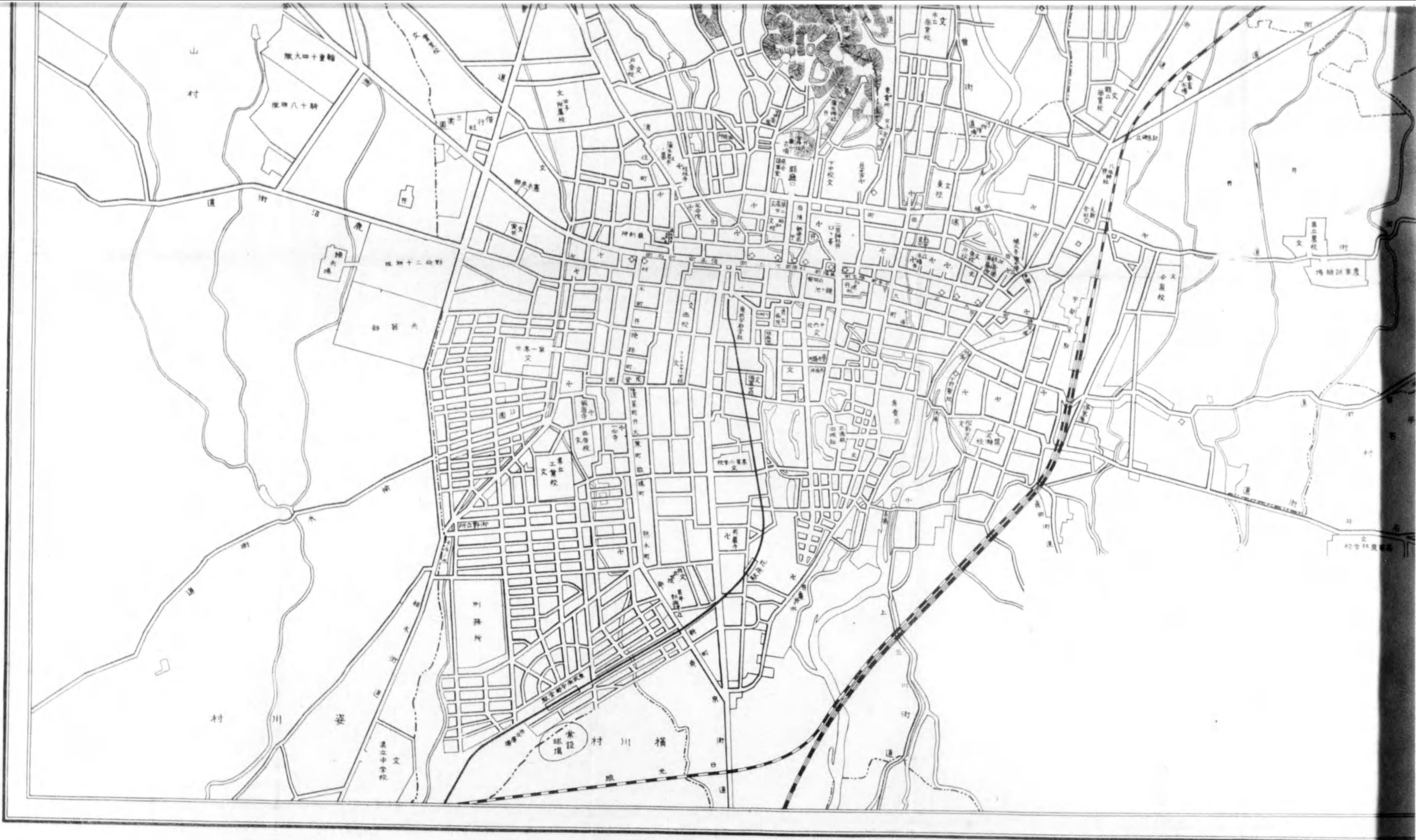


圖全市宮都字縣





宇都宮市旭町二ノ三、四三三  
印刷人 秋山錦次郎  
宇都宮市旭町二ノ三、四三三  
印刷所 株式会社印刷所



山村

第四十番地

第八十番地

第十二番地

第六番地

第一番地

文工学校

川村

川村

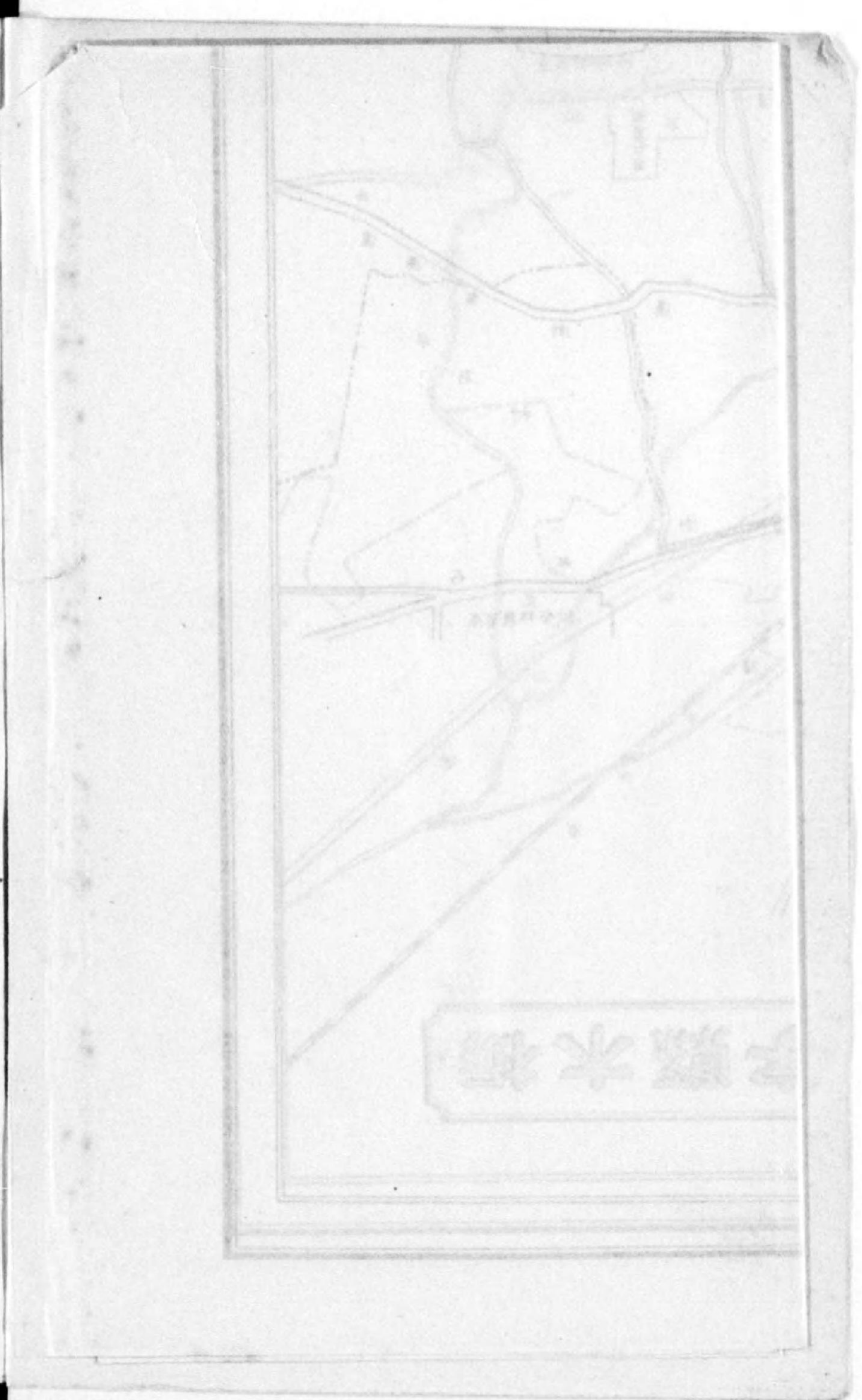
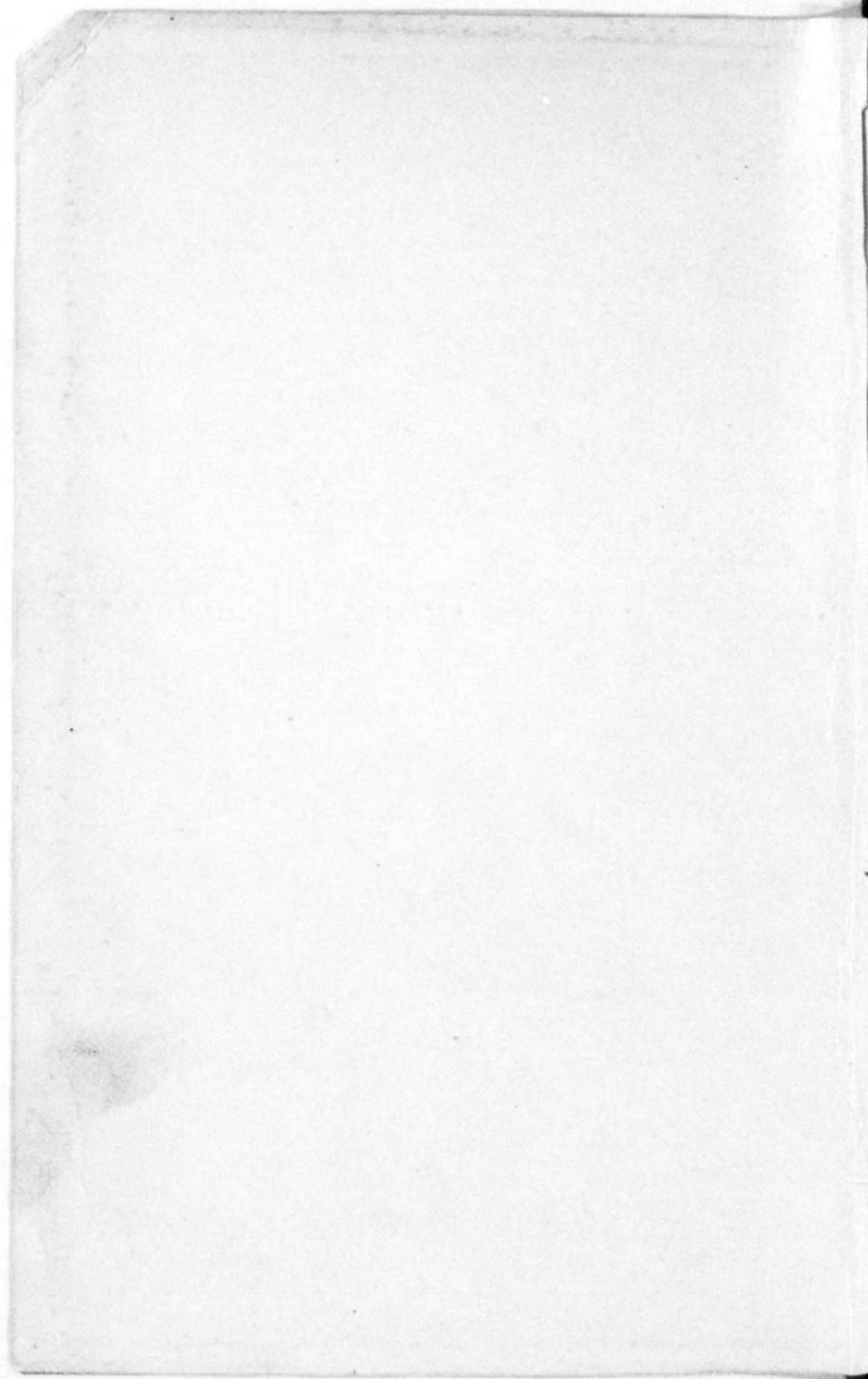
球場

文立中学校

公文学校

公文学校

公文学校





14.2  
191



宇都宮市役所

14. 2□-191



14.2□

191

終